HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ジャン・ボダンの生涯（４）
Author(s)	清末, 尊大; KIYOSUE, Takao
Citation	北大法学論集, 30(4), 1-90
Issue Date	1980-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16295
Type	departmental bulletin paper
File Information	30(4)_p1-90.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

ジャン・ボダンの生涯（四）

清末尊大

目次

はしがき
一　形成期：一五二九、三〇年―五九年
二　実践を求めて：一五五九年―七四年
三　実践を求めて（続）：一五七四年―八四年……（以上、二五巻四号、二六巻三号、二八巻一号）
四　安らぎを求めて：一五八四年―九六年
序
第一章　ラテン語版の『国家論』と子供の教育
第二章　リーグ支配の時代……（以上本号）
第三章　『自然の劇場』『パラドックス』『七賢人の対話』
第四章　平和と死

文献目録……（二五巻四号）
一　ボダンの著作
二　ボダンの手紙
三　ボダン研究

四　安らぎを求めて：一五八四年―九六年

序

一五八四年六、七月の王弟フランソワとオラニエ公の相次ぐ死はフランスとネーデルラントに危機をもたらし、そして両内戦にスペインとイギリスの介入を招いて、緊張の高まっていたヨーロッパに国際宗教戦争の危機をもたらした。

王弟フランソワの死によって王位継承権がユグノーのナヴァール王アンリに移ったフランスでは、異端の王をもつことに反対してギーズ公アンリ率いる強力なリーグが再生し、スペインと同盟して、八五年七月にアンリ三世を屈服させ、ナヴァール王アンリに宣戦を布告した。ナヴァール王アンリはイギリスとドイツ新教徒諸侯に軍事的、財政的援助を求め、既に二〇年以上も内戦に見舞われてきたフランスに最大の宗教戦争が始まった。「国父」オラニエ公の死によって統合者を失ったネーデルラントでは、再び内部対立が激化し、その間隙をついてパルマ公ファルネーゼは次々と都市を再征服し、八月に過激派カルヴィニストの拠点ガン、テルモンデ、メクレン、翌八五年二月にはブリュセル、そして八月には遂に、未だヨーロッパ経済の中枢であったアントワープをおとした。残るはホラント、ゼーラ

ント、ユトレヒト、フリースラント、それにヘルデルラントとオーヴェルアイセルの一部だけであり、それも指導的地位を要求する豊かな沿岸二州（ホラント、ゼーラント）とその他の州が対立し、都市の内部では都市貴族とますます南部から逃げてくる過激派カルヴィニストの中・下層の市民が対立する、まとまりのないものであった。全国議会は絶望して、フランスとイギリスに援助を求め、アンリ三世、そしてエリザベスに無条件で主権者の地位の提供を申し入れていた。

イギリスでは、レスター、ウォルシンガム派がプロテスタントの対外政策に乗り出し、ネーデルラントの反乱とフランスのユグノーにもっと積極的に支援するようエリザベスに圧力をかけていた。彼らはスペインとローマの国際的なカトリックの陰謀に疑心暗鬼し、スペインの力がポルトガルとその属領の併合、ネーデルラント再征服によってますます強化するのを恐怖をもって見守り、反宗教改革十字軍が大陸でプロテスタントを一掃し、大挙してイギリスに攻めてくるのは時間の問題だと恐れていた。アイルランドへの介入、メアリ！と通じた反乱とエリザベス暗殺の陰謀、オラニエ公の暗殺、これらはスペインとローマの意図を十分に明示している。神の正義のためにも、国益のためにも、大陸に介入すべきで、女王の逡巡は禍しかもたらさないだろうと悲壮な声をあげていた。このレスター、ウォルシンガム派の背後には、大洋に乗り出し、スペインとの関係を悪化させていたロンドンの商人と西部のジェントリーがいたし、また反宗教改革十字軍に恐れおののき、ますますプロテスタント愛国主義に燃える国民大衆がいた。スペインでも、イギリスとの戦争を求める圧力が強まっていた。フェリーペ二世の最高顧問グランヴェル枢機卿は国際的なプロテスタントの陰謀を叫び出していた。ネーデルラントの反徒とフランスのユグノーに対するイギリスとドイツ新教徒諸侯の支援、ポルトガルの正当な継承者を主張するクラトー修道院長ドン・アントニオに対するイギリスとフランスの支援、それにイギリスの大西洋とカリブ海での略奪行為はその十分な証拠である。そして、大西洋に面し

た海洋国ポルトガル――それに、その属領アゾレス、ブラジル、モロッコ――を手に入れ、トルコが関心を東方の敵ペルシァに移して地中海に平和が訪れた今こそ、首都をリスボンに移し、イギリスとフランスにあたるべきだと主張していた。アゾレスの勝利者（ドン・アントニオを支援するフランス艦隊を破った）サンタ・クルス侯もフェリーペにイギリス侵攻を求めた。

エリザベスもフェリーペもうるさい顧問たちに嫌気がさし、戦争だけは避けようとしていた。しかし、八四、五年の状況はこのいやいやながらの敵対者を顧問たちの政策へと駆りたて、戦争への決定的な歩みを踏み出させた。ネーデルラントの反乱とフランスのユグノーは危険な状態にあり、スペインの大陸での覇権確立を容認できない以上、エリザベスは大陸に介入せざるをえなかった。イギリスの資金によるフランスへのドイツ新教徒軍援軍はカルヴァン派のカジミールとルター派のドイツ新教徒諸侯の対立で八七年九月まで遅れるが、ネーデルラントの反徒に対しては、八五年八月に、反乱者の主権者になることは拒否したが、軍事的援助を約束し、一二月にエリザベスの寵臣レスター率いる四四〇〇のイギリス軍がネーデルラントに向った。また、同じ八五年に、ドレイクとホーキンスによる私拿捕の強化を容認した。それでも、エリザベスもバーリーも世界最強国スペインとの戦争だけは避けようとした。八五年にバーリーは三〇万ポンドの戦費を捻出できたとはいえ、財政能力はスペインの比ではなく、新興の海軍をもつが、大海戦の経験はなく、陸軍は経験のない小規模なもので、パルマ公のスペイン軍団の比ではなく、エリザベスは戦争が禍しかもたらさないことを確信していた。戦端はスペイン側から開かれるはずであった。

フェリーペの方も年老いてますます不決断になり、躊躇しながらも、嫌気がさして解任したグランヴェル枢機卿の政策をとらざるをえなくなった。八四年一二月にフランスのリーグと同盟し、これはまだアンリ三世がネーデルラントの主権者になることを阻止する目的しか持たなかったが、フランスへの介入の第一歩であった。そして、八五年の

イギリスのネーデルラント介入と私拿捕の強化は放っておけず、その問題を一挙に解決し、かつ神の正義にもかなったイギリス侵攻政策をとりあげ始めた。その最大の障害たる、フランスがイギリスを支援して介入する恐れは同盟するリーグによってなくなっていた。その大事業に要する莫大な戦費（当初四〇〇万ドゥカート要すると見積もられた）は八〇年代に入って飛躍的にのびた新大陸の銀（セビリアに入る金銀はスペイン貨幣に換算して八一―八五年に前五年の二〇七〇万ドゥカートから三五二五万ドゥカートに増え、そのうちフェリーペの税収は七九八万ドゥカートから九〇六万ドゥカートに増え、残りの銀行家に渡る分も一二七二万ドゥカートから二六一九万ドゥカートに倍増し、フェリーペはジェノヴァ人の銀行家から莫大な金を借りることができた）、それに未だ国土再征服熱（レコンキスタ）の冷めやらないカスティリャからの税収でまかなうことができた。残るは侵攻の法的口実だけであった。その口実は翌八六年五月に囚われの女王メアリーが提供した。メアリーはイギリスの王位継承権を異端の息子からフェリーペに移すことを宣言し、フェリーペは囚われの女王を保護下にいれ、報復を約束した。八七年二月のメアリーの処刑によって、スペイン嫌いの法皇シクストゥス五世も承認し、フェリーペは無敵艦隊アルマダの建造を急がせた。こうして、アルマダ、そしてフランスを戦場とする国際宗教戦争が始まり、世紀末まで続くことになる。

フランスでは、王弟が病に倒れるとすぐに、異端の王、しかも二度も邪説に陥った王をもつことに反対して、強力なリーグが再生した。その頂点には再び、シャルルマーニュの子孫を名乗り、簒奪者ユーグ・カペーの子孫にすぎないヴァロワ家、ブルボン家よりも王冠の権利をもつと主張するギーズ＝ロレーヌ家が立っていた。ギーズ＝ロレーヌ家はただちに、東部と北部で保護＝従者制を再結集した。ギーズ家の当主ギーズ公アンリはシャンパーニュで、その弟のマイエンヌ公はブルゴーニュで再強化し、いとこのメルケール公、エルブーフ公、オマル公はブルターニュ、ノ

ルマンディ、ピカルディで再強化した。ロレーヌ公、サヴォワのヌムール公は外から軍事的、財政的に支援し、この一族には更に、ランスの大司教でもあるギーズ枢機卿、ロレーヌ枢機卿、それに扇動家のモンパンシエ公未亡人カトリーヌもいた。ギーズ公は自らの党派の名義人としてナヴァール王アンリの叔父、無能で年老いた「赤いろば」ブルボン枢機卿を選び、内輪もめを避けた。

このギーズ＝ロレーヌ家のリーグは叔母にあたる囚われの女王メアリーのために同盟していた法皇、それに第一次リーグの同盟者ヌヴェール公から公然たる支持をとりつけるのには失敗した。法皇グレゴリウス一三世は、ペルヴェ枢機卿率いるリーグ派枢機卿の圧力やマチュ率いるリーグ派イエズス会士の嘆願にも拘わらず、カトリックの王権との対立を恐れて、公然たる支持を与えることには躊躇した。ヌヴェール公も王権との対立を恐れて、躊躇した。しかし、一二月にジョワンヴィルでフェリーペの特使と会談をもち、アンリ三世がネーデルラントの主権者の地位を引き受けることを恐れるフェリーペから月々五万エキュの財政援助をとりつけるのに成功した（もちろん誠実に支払われたわけではなく、当時のユグノーの歴史家パルマ・カイェによれば、ギーズ公がその死までにフェリーペから受けとったのは五〇万エキュほどにすぎなかった、という）。

八五年三月に、リーグはブルボン枢機卿の名において、第一次リーグ発祥の地ペロンヌから宣言を発した。この宣言は異端を寛容し、エペルノン公、ジョワイユーズ公といった寵臣にばかり保護を与える王権を激しく批判し、七六年のブロワの三部会で約束された改革、とくに税の軽減と貴族の特権・官職の保障の実行を求め、三部会の少くとも三年毎の開催を要求した。そして、この宣言を認めない者を真の宗教と国家の敵だと断罪し、真の宗教回復のために武力を行使する旨宣言した。これはアンリ三世に対する宣戦布告であった。リーグが強い東部と北部では、貴族はわれ先にと宣言に誓約し、リーグの諸公はリーグについた都市を次々と征服していった。ギーズ公はシャロン（＝シュ

ル＝マルヌ）に司令部をおいて、ブールジュ、ヴェルダン、それにロレーヌのトゥールを征服した。マイエンヌ公はディジョン、マコン、オクソンヌを征服した。メッス、オルレアン、リヨンでもリーグについた市総督が反乱を起していた。ナヴァール王、コンデ公、ダンヴィルが指導権をめぐって対立しながらも、リーグに対する会談をもっていた南部でも、ナヴァール王妃マルグリートがアジャンで夫と兄に反旗をひるがえしていた。熱烈なカトリックの首都パリでは、こうした貴族のリーグとは別に、八四年末に都市のリーグが生まれ、アンリ三世に対する戦いに立ち上がろうとしていた。また、八四年にイギリスから追放され、フランス大使になったメンドーサも、ネーデルラントの主権者の地位を引き受けないようアンリ三世に圧力をかけていた。

強大化したリーグの圧力を前にして、アンリ三世はナヴァール王の改宗の説得に失敗すると、ガスコーニュの次男、三男からなる親衛隊「四五人隊」をつくって身辺を固め、政治は母にまかせて、イエズス会士オジェの指導のもとにますます祈禱と贖罪の生活に退いた。カトリーヌはリーグとの妥協交渉を続け、ブルボン枢機卿は涙ながらに馬鹿げたことをしたと詫びたが、リーグの指導者は彼ではなく、ギーズ公から最後通牒をつきつけられ、八五年七月にリーグに屈し、ヌムール協定に調印した。寛容王令を廃棄し、ユグノーをあらゆる官職から追放し、リーグとともにユグノー弾圧にあたることを誓約した。リーグの諸公には彼らが征服した町まで与えられ、ギーズ公はシャロン、ヴェルダン、トゥール、サン・ディジエ、マイエンヌ公はボーヌ、ディジョン、ブルボン枢機卿はソワソン、オマル公はルー、メルケール公はディナンを手に入れた。アンリ三世も七月王令で、「私の良心にはかなっているが、しかしいやいやながら」この弾圧政策を確認し、リーグに屈した。スペイン嫌いの新法皇シクストゥス五世も遂にリーグを支持し、九月にアンリ・ド・ナヴァールの王位継承権を否認し、破門した。こうして、最後にして最大の第八次宗教戦争「三人アンリの戦争」が始まった。メルケール公はアンジュ、ポワトゥ、マイエンヌ公はサントンジュ、ペリゴー

ルへと侵攻し、ギーズ公はイギリスの援助によってドイツ新教徒軍が侵入してくるという脅威のもとに、東部、とくに東部におけるユグノーの拠点たるブイヨン公のスダンの町を攻撃し、オマル公はドゥランを占領し、ピカルディを制圧した。しかし、アンリ三世はやる気がなく、ナヴァール王アンリもドイツ新教徒軍の介入待ちであり、戦争は地方での散発的なものにとどまり、ドイツ新教徒軍が侵入する八七年九月から本格化することになる。

この一五八四年という歴史転換の年は、ボダンの生涯にとっても転換の年であった。宗教信仰が疑わしいポリチーク、あるいは異端のユグノーとみなされていたボダンはこれ以後ランの町、パリから北東に一三二キロ程離れた、人口一万にも満たないイル・ド・フランスの地方都市だが、リーグの諸公の拠点たる東部を結ぶ要衝の町ランで困難な状態におかれることになる。そして、内面への亡命を強いられ、実践から退いて、安らぎを求めてゆくことになる。当時、ボダンを尊敬するある若き知識人は「ジャン・ボダンについて」と題する詩を献じ、こうボダンの無事を祈った。

「ボダンよ、汝は歴史に通じ、ローマの
法律に通じ、そしてギリシアの知恵に通じている。
汝は国家に関する非常に多くのことを体系的に提示し、そして教えた、
都市と国家がどうすれば統治されうるかを。
汝は悪魔たちを追っ払い、魔術師の忌むべき呪文を
霞のかなたへと追い払った。
もし先祖の年代記の研究にむかう者がいれば、
その者は荒野のなかで汝に安全に導かれ、道を見つけるであろう。

ごきげんよう、偉大な我らが育ての親、ごきげんよう、世界で最も著名な方、
願わくば宮廷が汝の博学な舌を黙させざらんことを。」

第一章　ラテン語版の『国家論』と子供の教育

一五八三年にランの家族のもとへ帰り、翌八四年にパトロンの王弟フランソワを失うと、ボダンは再び定職を失って、生活に苦慮しながら、ラテン語版の『国家論』の完成と子供の教育に専念した。

王弟フランソワの死とともに、ボダンは政治生活の期待は捨てた。王弟に仕えていた者はポリチークやユグノーとみなされ、疑われており、もはや新たな政治生活の見込みはあまりなく、ボダン自身このことをよく知っていた。[1] ランの町でも既に中・下級聖職者による教会のリーグが形成され、ピカルディのオマル公と関係をもち、フランシスコ会士の説教や聖行進によって民衆をたきつけており、「この町ではポリチークで疑わしいカトリック教徒として通っていた」ボダンは時勢の変化を身近かに感じていたはずだ。[2] それに、ボダン自身すでに五〇代半ばに達しており、四〇歳頃から老境に入ると考えられていた当時としては、[3] 政治生活から退いて瞑想生活に入るべき潮時だとも思えたであろう。

ボダンは自らの政治生活の期待は捨てた代りに、同様に王弟の書記官の職（これはボダンの推薦によろう）を失った継子のニコラ・バイヤールのために、「王弟殿下に仕えていた者が好感をもたれていないことを知っているので、あまり期待できないが、それでもあらゆる手づるを尽くして」運動した。パリ高等法院の弁護士ドージェ（もしくはドギエ）を通じて、おそらく王家や高等法院のコミセールの職を求め、ド・クラタン氏なる者を通じてナヴァール王家に職を

求め、また前のイギリス大使カステルノーを通じて、「非常に立派で気立の良い」継子に、囚われの女王メアリーの書記官の職を求めた。[4] 実に、ヴァロワ家、ユグノーのブルボン家、リーグのギーズ家と、対立など関係ないといったコネのつけ方であり、保護＝従者制はこうした傾向を強めていたが、子供――継子であれ――のために最善を尽くすのが家父長たる者の当然の義務であった。

しかし、この義父を好まない継子が伯父のニコラ・ツルイヤールを通じて申し入れてきた要求、官職購入のために財産を売って金を作ってくれという要求に対しては、断わらざるをえなかった。この野心的な継子が求めているのは、俸給（年俸）一二〇〇リーヴル（トゥルノワ　以下同様）、売官価格一万五〇〇〇リーヴル以上の上級官職であった（一六世紀の売官価格と俸給は断片的にしか解らず、同じ官職でも事例によって異なるが、パリ高等法院を例にとれば、ニコラが求めているのは売官価格からすれば評定官ぐらいであり、俸給からすれば長官級の最高位の官職であり、訴願審査官あたりになろう）。ボダンがニコラの要求に反対するのは、まず、この内戦時代には官職よりも不動産の方が安定している、ということである。俸給は今日一二分の一かそこらしか支払われておらず、しかもこうした事態でさえまだ良い方で、まもなく官職購入の元金さえ失うような事態になろう、と。（こうしたボダンの指摘は正しいが、しかし当時官職は何よりも社会的地位であって、継子が求めているのもそれであり、この当時の常識がボダンには欠けている。）それに、何よりも、ボダンには金がなかった。ニコラの亡父クロード・バイヤールはかなりの財産（その父から相続したピカルディのアム周辺の五五〇二リーヴル相当の土地と自らラ・フェールの周囲に購入した七八六九リーヴル相当の土地）を残していたが、そこから入る地代に後に残された妻と三人の子供の生活がかかっており、末っ子のニコラが相続できるのは、たとえ長子権を無視しても、そのうちの一部、三〇〇〇リーヴルそこそこにすぎなかった。生活にさえ苦慮しているボダンには、とても金はつくれなかった。「もし王公やその他の方（王弟フランソワやサン・カンタンの総督モワ侯爵夫妻）が私に支払う義務ある金を支払ってくれ

れば、かなりの金が手に入りますが、しかしとにかくあまり期待できません。」ボダンはこの義父を好まない継子に、ヴェルマンドワ初審裁判所長官ドフェールの母親に二五二五リーヴルで永代賃貸しているプラセット通りの家以外には、財産をつくれなかったことを詫び、「あなたの幸福、名誉、出世のためにはできる限りのことをしたい」が、官職購入だけはあきらめてくれと懇願するしかなかった。追伸までつけ、懇願した。「当地には非常に少ししか金がなく、借金をすれば多くのものを失うことになってしまいます。どうかそのことを考えて下さい。」[5]

ボダンは、生活費が年八〇〇リーヴル以上かかるのに、妻の財産からの収入年三〇〇リーヴル、それにプラセット通りの家の賃貸料（年一〇〇リーヴル以上は入っていただろう）しか定期的収入がなく、[6]瞑想生活にばかり耽ってもおれず、法律顧問をして、生活に苦慮しなければならなかった。生活費はランの町でも、パリほどではないにしても、確実に嵩んでいた。小麦でみると、八四、五年に一キャルタルあたり四〇ソル（二・五リーヴル）にあがり、八六、七年の凶作で六〇ソル、七〇ソル、そして八七年には一〇〇ソルにまであがり、その後も四〇ソルから五〇ソルの間で高値安定したままであった。[7]

ボダンは帰国後、再びサン・カンタンの総督モワ侯爵夫妻の法律顧問をやったが、あまり収入にはならなかった。彼はパリ高等法院やノルマンディの夫妻の領地にまで出かけ、誠実に職務を果たしたようで、夫妻を満足させているが、しかし侯爵夫妻はやむをえないときに二〇エキュ（六〇リーヴル）とか支払うだけで、約束した金の支払いに誠実ではなかった。九四年にはボダンに約束した額が一四〇〇エキュにも達していたが、侯爵夫人は九四年四月の手紙で四〇〇エキュに値切り、ボダンはその手紙の裏に、「侯爵夫人は支払う義務ある額より一〇〇〇エキュ少ない、四〇〇エキュをボダンに支払うことを約束した」と書きつけた。しかし、この値切った額さえ支払われなかったようで、彼は一二月に「債務者」の財産を差し押さえる特許状をえている。[8]

ボダンは八七年に、義理の兄弟ニコラ・ツルイヤールが戦争にまきこまれて死んだことにより、ヴェルマンドワ初審裁判所（兼、ラン上座裁判所）の検事の職を継いだ。イギリスの援助によってドイツ新教徒軍が侵入してくるという脅威のもとに、八六年末から八七年初めにかけてギーズ公が東部、とくに東部におけるユグノーの拠点スダンの町を攻撃した戦争にまきこまれたのであろう。ボダンはこの親しい年下の義兄の死を悼んで、こう、ランのサン・ピェール・ル・ヴィエイユ教会の墓碑銘に記している。

「一五八七年、五二歳で没す。ニコラ・ツルイヤール、ヴェルマンドワの国王検事。神を信じ、両親を敬い、縁者を愛した彼の人、不幸にも激しい戦火にあって死す。非常な悲しみのうちに、その官職の相続人ジャン・ボダン記す。[9]」

これによってボダンは定職を得たが、しかし官職はあくまでも社会的地位であって、ボダンのような堅物にはあまり収入にはならなかった。初審裁判所の検事の俸給（年俸）はせいぜい一〇〇リーヴルといったところで、この少ない額も不定期に一部支払われるだけであり、官職は役得をかせげない堅物には収入になるものではなかった。彼の妻は兄の遺産の一部を相続したが――そのために、ボダンは妻方の親戚で、有名なアンリ・ド・メムの息子のメムからニコラ・ツルイヤールの負債の支払いを訴えられている[10]――、彼自身遺書のなかで嘆いているように、「フランスで最も貧しい国王検事の一人[11]」であることに変わりはなかった。

そのうえ、ボダンの官職相続にはリーグから異議が唱えられた。八七年五月二九日に、リーグの諸公はカトリーヌに、王がヌムール協定に違反して官職を「新宗教の疑いある者」に与え、「良きカトリック教徒」が官職につくのを妨げていると不平を述べ、その例の一つとしてボダンがランで官職を得たことをあげた。それに対してカトリーヌは、王は良きカトリック教徒にしか国王官職の保有を認めないだろうと確約した[12]。その五日後、おそらくこのことが原因で（ショヴィレやデヴィズムが考えるような、『魔女論』や『七賢人の対話』に対する嫌疑が原因ではあるまい）、ボダンはパリ高等

法院の検事総長の命令により、ヴェルマンドワ初審裁判所長官ドフェールの取り調べをうけた。長官ドフェールはもちろんボダンの知り合いであり、[13] 取り調べがどの程度のものであったか解らないが、ボダンはランの聖職者二名を含む一〇名の名士の証言によって潔白だ、つまり、取り調べの性格からして、「良きカトリック教徒だ」と認められた。[14]

ボダンはまた、八七年一一月から八九年四月までナヴァール王家のピカルディの飛び地マルル伯爵領の法律顧問をしたが、これもあまり収入にはならなかった。ボダンはナヴァール王家の顧問ヴィベールからそれを依頼された手紙の余白に、「ナヴァール王の法律顧問をやったので／手当がもらえる／ナヴァール王は私に一年半分支払う義務がある／一五八九年四月五日記」と書き込んだ。[15] しかし、ナヴァール王家に直接のコネができたことは、後に、リーグを支持したボダンが財産、官職の保障をもらい、継子のニコラ・バイヤールがアンリ四世のコミセールとしてカレの財務総督になるのに役立ったろう。[16]

これ以外にも、ボダンは八六年の一〇月一杯はオルヌ伯の法律顧問をやっており、[17] 様々な臨時の法律顧問をやって、生活に苦慮していたであろう。

ボダンは帰国後、まず『国家論』のラテン語訳に専念した。彼はこのヨーロッパの知識人共通の言語に訳す作業を、友人のダンピェール伯（法服貴族）ジャック・デュ・ヴァルに勧められてイギリス訪問前から始めていたが、帰国後専念し、八四年一二月三日には完成して、そのデュ・ヴァルに捧げた。[18] 出版は何らかの事情で遅れ、八六年である。

ラテン語版の『国家論』は単なるフランス語版の翻訳ではなく、多くの増補・改訂が加えられている。内容の整理・簡潔化、引用の文献学的厳密化、短かい付け加えが数多くなされ、構成変えもなされている（新たに三巻八章が

設けられ、ここに市民論がまとめられた)。対象とする読者がフランス国民からヨーロッパの知識人に変わったことにより、フランスに関する記述が減って、古典古代とヨーロッパに関する記述が増え、政治思想も、理論そのものはほとんど変わっていないが、より一般化されている。既に見たように、イギリスとネーデルラントでの経験による見解の変更も加えられている。また、『国家論の弁護』初め他の著作からの引用も多く、とくに歴史変革論、風土論、宇宙論、神学に関する増補・改訂が数多い。[19] 更に、ラテン語版の『国家論』はフランス語版の増補・改訂版というだけではなく、根本的に異なった性格もおびている。それを生み出しているのは、既に『魔女論』にもみられた、宗教戦争に対する危機意識の極度の昂揚であり、ユダヤ教（旧約）化した神観・宇宙観がますます国家論と結合したことである。

ボダンの宗教戦争に対する危機意識は極度に昂揚し、今や宗教戦争の責任は君主にあり、君主が神法・自然法に違反して統治していることに神は怒り、報復としてこの宗教戦争を起こしているのではないかと考えた。

「私たちはこの何年来まったく激しい内戦の嵐にもまれ、多くの者が難破し、さらに多くの者が海に投げ出され、その大多数は深みに沈み、かなり多くの者は海岸に打ちあげられ、ある者は岩礁にぶつかり、ある者は波にさらわれ、無傷で逃れえた者は数少ない。私はといえば、聖書の言葉があてはまります。「約束の壁は涙もて告げ知らせる／神の強き衣服を／剥がれていることを。」かつての危機、そして将来も決してなくならないだろう危機にかんがみて、わが王国を展望すれば、私は後悔の念に捉えられます。また、国家統治者が互いに対立して、ある者は舵を変えようとし、ある者は帆をはろうとし、ある者は帆をたたもうとし、かくして自分と私たちの利益に反した同盟をだらだらと単調な劇にして見せていることに、私は恥ずかしい思いに捉えられます。……

かかる事態が私をして、戦争が一時おさまった後に国民の考察に資するように、私が国家に関して理解したことのすべてを公表、出版するよう強いました。それは一つには、国民が将来わが王国の国家形態を可能な限り滅亡から救うようにするためです。あるいは、すっかり年老いて衰えてしまったようにみえるわが王国がもはや確実に、どんな人間の努力も、どんな助言も防げないほど崩壊しかけているのであれば、かつての禍を生き延びた者が国家の突然の没落や崩壊によって完全に押しつぶされてしまうこ

とのないように、いわば見張台から警告するためです。何故なら、こんなにひどい禍はときに神の報復の攻撃によって起ることがあるからです。全能の神が破滅に決定している国家統治者は分別と慎重さをいっさい奪われ、最大の恥辱にまっさかさまにおちるのです。その確実な証拠は、彼らがいやしがたい狂乱で国家を統治しているとき、最も正気だと信じていることです。[20]」

恐るべき正義の神の支配する宇宙に従属した有機体という国家観は、宗教戦争に対する危機意識を容易に昂揚させ、危機意識を容易に神の介入と結びつけさせ（国家は船であり、激しい嵐という超自然現象によって容易に沈没する）、君主が神法・自然法に違反して統治していることに対する神の報復という考えにさせる。ボダンはフランス語版でアンリ三世を称賛し、宗教戦争を解決してフランスにかつての栄光をもたらす担い手として大きな期待を表明していた箇所をすべて削除した。そして、神法・自然法に違反して、臣民の財産を奪い、官職を悪しき者に与えるだけでなく、魔女や魔術師を保護し、臣民からまきあげた金を最も恥ずべき連中にばらまく君主も暴君と暴君の規定を強化し、神法・自然法に違反した暴君に対しては神の報復という考えを前面におしだし、神に召命された者と外国の君主だけでなく、君主だろうと臣民だろうと外国人にはすべて武力抵抗権、暗殺権を認めた。[21] ボダンは、アンリ三世が神の報復を受けるべき暴君であり、アンリ三世が神法・自然法に違反して統治していることに神は怒り、報復としてこの宗教戦争を起しているのではないかと考え始めた。

こうしたユダヤ教（旧約）化した神観・宇宙観による国家観によって、「ポリチーク最大の理論家」ボダンは後にポリチークから逸脱し、リーグを支持することになる。ボダンはフランス語版の『国家論』の絶対君主政論から意見を変えておらず、リーグの理論には決して同意しないが、リーグを暴君アンリ三世に対する神の報復の道具と解することによって支持することになる。アンリ四世の勝利とともにポリチークの正当理論となる、王権神授説による絶対君主政論を展開するトゥルーズの法学者ベロワなどは別にして、ポリチークの多くの者も「のらくら王」アンリ三世

の奇矯な行動や増税、売官を続ける政策を批判していたが、アンリ三世を神の報復を受けるべき暴君と規定する者はまずいなかった。それに、この点ではポリチークの多くの者も国王は国民大多数の宗教たるカトリックでなければならない、少くともそうでなければ平和と秩序はありえないとし、ナヴァール王アンリの改宗を求めており、あまり相異はないが、ボダンはユグノーのナヴァール王アンリの王位継承には反対であったろう。ボダンにとって、王位継承の王国基本法はあくまでもサリカ法に基づく法的制度であり、王位は父系で最も近い男性、兄弟では長子に、世襲権によって（相続権ではなく、従って分割できない）自動的に帰属するものであった。そして、問題の長子の息子たる甥と叔父ではどちらが優先するかという点については、フランス語版ではこう解決していた。直系の世襲の場合には、ローマ法の代父世襲権（repraesentatio）の概念を使う法学者の多数意見と最近の慣習によって、長子の息子たる甥が優位する。傍系の世襲の場合には、父が本来もっていない権利の代父世襲などありえず、法学者の多数意見たる代父世襲権の概念の使用を否定しながらも、慣習として甥が優位する。但し、傍系の場合、王位以外では、その傍系の長が世襲するのであり、従って父系で何代目かが問題であり、同じ代の最年長者が世襲する（甥と叔父では、叔父は常に甥より一代早いので叔父が優位する）、と。[22] この実質的に法学者の多数意見に合わせた説では、アンリ三世の王位継承者は、ヴァロワ家の父系で傍系のブルボン家の長子の息子（甥）たるナヴァール王アンリであった。しかし、ボダンはラテン語版でナヴァール王アンリを排除するように意見を変えた。直系の場合でも、甥と叔父のどちらが優位するか法理上も慣習上も決着がついておらず、世襲による混乱を避ける上にも弱年な甥よりも叔父の方に分があるが、この二〇〇年来この問題が起きたことがないとし、一応法学者の多数意見に従うとした。そして、その付け足しに一語「傍系の場合も」と付けるだけで、ナヴァール王アンリの王位継承を根拠づける部分は見えなくした。それに代って、フランス語版の但し書きを王位継承にも拡大適用し、ラテン語版だけ読めば、傍系の場合には叔父の方

が甥より優位すると見えるようにした。[23] ボダンは王位の伝統と国民大多数の宗教に反する王位継承者をもつことによる混乱を恐れて、意見を変えたであろう。

ボダンはこうした宗教戦争に対する危機意識の極度の昂揚、つまりユダヤ教（旧約）化した神観・宇宙観、神法・自然法に違反した君主と国民を罰しに直接この世に介入する恐るべき正義の神の強調のなかで、『国家論』がその主要な部分をなすはずであった普遍法体系の成立基盤を疑い始め、普遍法の研究を放棄し始めた。普遍法の成立基盤はこうであった。法律は主権者の命令であり、不断に変化するが、そこには人間理性に反映した「神の光」としての衡平、恒常不変の法という要素も含まれている。法律は主権者の意志であるが、主権者が「正しく、生きた理性に基づいて」意志した「正しい命令」でもあり、神法・自然法に基づく「正しい命令」という共通の根をもっている。より一般的に述べれば、人間は自由意志によって行為しているが、一部には自由意志によって自然の法を模倣し、神の助けをえて行為してもいるのであり、人間と自然・神、人間史と自然史・聖史はまったく分断されているというものではない。従って、これらの恒常不変の法、神法・自然法に基づく正しい命令、聖界と自然界から来る確実で正義にかなったもの、つまり「法律作成と国家統治の唯一の模範」が諸国民の法律の歴史的—比較的研究によれば認識しうる、ということであった。この法律と法、主権者の意志と正しい命令、人間と自然・神のバランスのとれた関係を、彼はラテン語版の『国家論』で疑い始めた。

ボダンは諸国民の法律には神法・自然法に基づく法、正しい命令という要素は含まれておらず、その多くは、「気違いが自ら承認して命じた法律のように」、法律の名に値しない不正なものだ、という考えを打ち出した。[24] そして、その不正を激しく攻撃した。例えば、奴隷制は多くの国民に共通な普遍法だが、自然法に違反した不正なものであり、即刻廃止して、奴隷を市民として国家に受け入れるよう、主張した。[25] また、多くの君主が「人間の暴力や生来の

欲望」によって、不正に戦争をし、不正に修道院の財産を没収し、不正に本来の王たる姉を投獄していることを激しく攻撃した。[26] こうした諸国民の法律が人間の恣意によって決められており、神法・自然法に基づく法、正しい命令という要素をもっていないことも、有徳な人間は数少なく、ましてや有徳な主権者など「奇跡」であって、そうした主権者の意志が法律であることを考えれば、「何ら驚くべきことではない」のである。[27]

それに、ユマニスムのエネルギー源であった古代世界と新世界への水平線の拡大が、その拡大ゆえに、法・政治制度の無限の多様性を教え、知的危機をもたらした。ユマニスムの多様性の承認、つまり「調和」の理念は根本における統一、一致を前提にしたものであり、水平線の拡大はそれを見失なわせた。ボダンは古代から現在までの膨大な諸国民の法・政治制度の資料を集めて比較していたが、国民によって価値の優劣、名誉・不名誉、有益・有害の基準が異なるので、「国が異なれば、法律もまったく異なり」、その間に共通なものがない、と考え始めた。例えば、貴族は徳、それに生まれを基準とすべきものなのに、その基準が国民によって軍事、公生活、官職、富、封土、知識、家柄、主権者の授与・売却等々多種多様で、共通の貴族の定義でさえ不可能であり、「公法も私法も空虚な臆見や人間に一般的な誤謬に満ちている」と批判した。[28] 諸国民の法律が無限に多様で、共通の基準がないということは、ボダンの宇宙論では、法律が人間の恣意によってのみ作られており、神法・自然法に基づく法、正しい命令という要素をもっていないということを意味した。

このように、ボダンは法律と法、主権者の意志と正しい命令、人間と自然・神の関係を分断し、法律、主権者の意志、人間のことは人間の恣意によってのみ決まるので、無限に多様で、基準も法則もなく、その多くは不正なものであると考え始めた。この考えを徹底させれば、もはや普遍法、国家学研究の根拠はなく、彼は普遍法、国家学の研究を放棄し、神と自然に関する多くの増補を加えて、神学、自然学に研究を移し始めていた。彼は宗教戦争のなかでの

人間界のカオスに疲れ、モンテーニュが人間の不安定さに疲れながらも人間を見続けようとしたのとは異って、神の正義の欠如した人間界を見るのをやめ、神と神の法の貫徹した自然の瞑想のうちに心の安らぎを得ようとしていた。

ボダンがランの家族のもとへ帰ったとき、息子のエリーとジャンは数えで四歳と三歳であったが、彼は自から子供の教育を始め、そして非常に熱心にやった。彼は以前から朝晩家族とともに聖書（旧約）を読み、詩篇、とくにその一四三篇を歌って瞑想していたが、[29] その前後の朝食前と夕食後の時間を子供の教育にあて、法律顧問の仕事のために子供の教育が中断するのを嘆いている。[30] ボダンの考えでは、子供を有徳の人間に教育することは、継子のニコラ・バイヤールの面倒をみるのと同様に、父たる者の義務であり、家父長権に付随する当然の義務であった。[31] それに、子供の教育がこの困難な時代の安らぎの場でもあったろう。

八六年一一月に、ボダンはこの三年間にやった子供の教育の方針と成果について、こう述べている。子供の教育の秘訣は「美しくて立派なものをすべて順序だてて」教えることだと考え、彼は体系的に教えた。まず目にとまるものをラテン語で呼ぶことから始め、自然、天体、宗教に関するものへと広げていった。そしてラテン語に慣れると、文法を教え、フランス語と同じくらい自由にしゃべれるようになるまで続けた。その後で、彼自身が編集した三〇〇の道徳律集をラテン語とフランス語で一日一つづつ覚えさせ、それと並行して、「非常に有益で、非常に楽しい」算術と幾何学を教えた。以上のことを三年間でやり、今後はキケロをラテン語で読ませ、フランス語に訳させること、それに彼自身が作成した「自然の美」に関するラテン語の六〇〇の問題を子供に出す予定である。[32]

これだけでも、ボダンが子供に施した教育がユマニスム教育であり、彼の関心がこの時期自然学、倫理学、神学に移っていたことが解るが、その性格をよりよく検討するために、それ自体はあまり重要な著作ではないが、子供の徳

育と高官の子弟の教育を扱った二つの著作をみておかねばならない。

ボダンは子供のために編集した道徳律集をもとに、『知恵の道徳律集』を書き、八七年九月四日には完成して長男のエリーに捧げ、八八年に出版した。このあまり子供向きでない著作は、ボダンがつけた徳の序列ごとにストア哲学者などのプラトン主義的言辞を二一〇の成句にして、左頁にラテン語、右頁にフランス語韻文で対に並べたものである。[33] この著作の基本思想は、全知全能の正義の神が報酬と刑罰の原理でもって、全被造物を絶対的に支配しているので、子供の徳育は宇宙の階層秩序をなした連鎖を段階的に昇らせるものでなければならない、ということにある。まず、思慮 (prudentia) の徳である。この世で傲慢な者、貪欲な者、不正な悪人が栄えるのを見ても、貧困にも不正にも甘んじて魂の「砦」を堅持し、苦難のなかで真理を求め、友情を求め、有徳でなければならない。全知全能の神は苦難に耐える善人には報酬を、傲れる悪人には処罰を下すのである。防御の戦争は正しいが、戦争は国土を疲弊させ、信仰と法を破壊するものであり、平和を求めねばならない。アナキー状態よりは隷属の方がまだましであり、より悪しき方を避けるのが思慮である。それに、「瞑想生活を送り、知恵あらんとする者は結婚を避けるべきである。」[34] 次に、より高次の徳は正義 (iustitia)、慈愛 (charitas) である。神に発する法が全宇宙を貫徹しており、神を恐れて、神の正義に従い、慈善を行わねばならない。[35] そして最後に、「すべての徳の女王」は知恵 (sapientia) である。それは神を恐れ、瞑想によって魂を肉体から解放し、神に犠牲として捧げて「法悦」「死」を味わう信仰によってのみ可能であり、万物の創造主たる神の「隠されたこと」を見ることにある。一切が全知全能の絶対的主権者たる神にかかっているのであり、最も忌むべきもの、多神教の迷信よりも悪いのは不信仰であり、無信仰者は神の秩序の破壊者である。[36]

それに、将来統治に携わる高官の子弟の教育を扱った著作、『君主や高貴な方の教育についてのジャン・ボダンの

助言』がある。この著作はザクセン人のボルニティウスが一六〇二年に、イタリアのロンギアーノの著作と一緒に出版したものであるが、ボルニティウスによれば、「著者のボダン自身に書いてもらったと誓った」ザクセン選帝侯の高官から彼の父が譲り受けたものであり、彼はそのフランス語手稿をラテン語に訳して出版した。[37] この著作は内容からして、ほとんど確実にボダンのものであり、それも『魔女論』以後の晩年のボダンのものである。そして、この著作はフランス語で書かれ、ギー・デュ・フォールの『教訓的四行詩』(七四年)やデュ・バルタスの『聖週間』(七八年)というフランス語の詩集が勧められているが、将来統治に携わるのに必要とされる法学教育が、ボダンが世界最高と誇るフランスではなくて、イタリアかドイツの大学で受けるよう勧められており、[38] 確かにドイツの新教派の高官のために書かれたものである。いつ、どういう機会に書かれたのか解らないが、あるいはネーデルラントで反スペイン闘争を企てているときに、新教のザクセン選帝侯の高官と関係をもち(ボダンは若い頃からランゲやボイツァーなどザクセン選帝侯の廷臣と関係をもっており、それが役に立ったかもしれない)、その高官のために書いたのかもしれない。

この著作の主張はこうである。子供の教育の根本は「神に対する恐れ」を教えることであり、これに知恵、知識、徳、健康、その他すべてのことがかかっている。そのためには、朝晩聖書(旧約の予言の書)を読み、詩篇を歌って、神に祈る習慣を身につけさせねばならない。[39] 子供の教育はまず、幼児のときに自然、天体、倫理などに関することを端正な古典ラテン語で呼ぶことから始め、それからラテン語の文法を教えるべきである。その後で、キケロをラテン語と母国語で教え、「偉大な詩人」ウェルギリウスに広げてゆくべきである。これを毎日やれば、自然に端正な古典ラテン語を身につけ、有徳な生活を自然に身につけ、キケロの雄弁を自然に身につけることになる。それに、記憶を高め、処世術を学ばせる歴史書を数多く読ませ、調和ある魂へと高める音楽、楽しくて有益な算術、幾何学、地理学、議論の展開に役立つラムスの弁証法を教えるべきである。[40] そして一六歳になると、大学で将来統治に携わるの

に必要な法学、「帝王学」（ボダンには帝王学というタームはなく、国家学の訳だろう）を学ばせ、学業の終わりには長期旅行をさせて、様々な国民の統治や法律の実態から生活様式、風俗習慣、国民性まで学ばせねばならない。[41] しかし、いっさいの知識、徳、知恵の根本は毎日朝早く起き、詩篇一四三の一〇を歌って瞑想することであり、これが子供の教育の根本でなければならない。神はそうする者を嘉し給い、天使に命じて眠りや幻覚のなかで将来起ることのすべてを告知させるのである。[42]

ボダンが主張し、実践した子供の教育は、既に五九年の講演で彼が主張していたユマニスム教育、何よりもエラスムスがヨーロッパ中に広めたユマニスム教育である。その早期ラテン語教育、文法偏重ではなくて、すぐれたラテン語作家を通じて自然に文法も、徳や雄弁も身につけさせる教育、知識偏重ではなくて、知識と徳と信仰を総合した知恵という全人的人間形成をめざす教育、これはまさしくユマニスム教育の理念である。ユマニスム教育もしばしば文法偏重、知識偏重の衒学に堕したが、そのたびにこうした人間形成という本来の理念が唱えられた。モンテーニュも当時、文法偏重、知識偏重の衒学に堕したユマニスム教育を批判し、古典作家や人との交わりを通じて判断力と徳を身につけた「紳士（ジャンティヨム）」、普遍的な人間形成の理念を主張していた（『エセー』一巻二五章、二六章）。

しかし、ボダンの教育論には、五九年の講演で彼がエラスムスやビュデ、ラブレー、ラムスから受け継いでいた、あのユマニスム教育に対する熱狂や感激はもはやない。もはやユマニスムの学校が衰退していた状況で、彼が五九年の講演で熱烈に主張し、『国家論』でも繰り返していた、[43] 公教育でのユマニスム教育による市民（国民）形成という視点は消え、彼が批判していた家庭教育にユマニスム教育を避難させようとしている。しかも、その家庭教育もまるで（宗派のない）修道院で、すべてが恐るべき正義の神にかかっており、ユマニストの第一世代の教育論の基底にあった人間理性に対する信頼や明るさは失せ、何と陰気で抹香臭いことだろう。「敬虔」の理念はユダヤ教（旧約）化し

た「神に対する恐れ」に変えられ、そのもとに「人間性」の理念は従属している。モンテーニュも人間理性に対する楽観的な信頼は失ったが、同時に信仰に対する全面的な信頼も失っており、モンテーニュの言う人間形成は宗教とは関係のない世俗的な人間形成であり、ボダンの言う圧倒的に宗教的な人間形成と著しいコントラストをなしている。ボダンはその信仰の内容が異なるだけで、明らかに反宗教改革、とくに彼が嫌ったアンリ三世の神秘的な反宗教改革と時代雰囲気的な共通点をもっており、一七世紀初頭に信心深いユマニスム(ユマニスム・デボ)として現われる流れに立っている。

(1) 一五八四年八月(?)のニコラ・バイヤール宛ての手紙(文献目録二—6)。
(2) Antoine Richart, Mémoires sur la Ligue dans le Laonnois (publiés par la Société Académique de Laon, Laon, 1869), pp. 68, 510-4.
(3) C. Gilbert, When did Renaissance Man grow old ?, Studies in the Renaissance, vol. 14, 1967, pp. 7-32; D. Herlighy, Viellir à Florence au Quattrocento, Annales E. S. C., tom. 24, 1969, pp. 1338-52.
(4) 一五八四年八月(?)のニコラ・バイヤール宛ての手紙、一五八五年九月三〇日付けのカステルノー=モーヴィシエール宛ての手紙(二—7)。
(5) 一五八四年八月(?)のニコラ・バイヤール宛ての手紙。
(6) 同手紙。
(7) Richart, op. cit., pp. 505-6.
ランの町におけるキャルタルの容量は解らないが、価格が高くなるように容量を少なく考えて六〇リットルとしても、八四、五年には一スチエあたり六・五リーヴルで、パリより四割方安く、ランの町では生活はパリよりずっと楽だったろう。
(8) Ponthieux (III-69), pp. 74-91.
(9) Chauviré (III-52), p. 38 n. 2.
ショヴィレはボダンが七八年四月の魔女裁判に加わったのは検事としてであったと考え、ボダンが官職を相続したのは官職なしにブロワの三部会に加わった七七年二月から七八年四月までの間だとしている(Chauviré, pp. 38-9)。しかし、ボダンが魔女裁判

に加わったのは検事としてではなく、特別顧問としてであり、またボダン宛ての手紙に「ラン代官区及び初審裁判所の国王検事」の肩書きがつけられるのは八七年一一月からであり（Ponthieux, pp. 61–2）、それに次に述べるボダンの官職相続に対するリーグの異議からして、ボダンがニコラ・ツルイヤールの官職を相続したのは確実にこの八七年である。

なお、ボダンが検事として扱った事件については、Chauviré, p. 76 参照。そのなかで興味あるのは、八八年九月にブリセなる高利貸に一五〇エキュの罰金を求めていることである。ボダンにとって、高利貸や銀行は何よりもイタリアから入ってきた害悪、「泥棒よりももっと悪く、もっと下劣なもの」であった。王の財政初め貴族や貧しい者を破産させ、今日の内乱の遠因をなしているものであり、また神法に違反した神の冒瀆で、神の報復を招くものであった（République, V, 2, pp. 707–10; VI, 2, pp. 893–7. 一五八九年三月の手紙、文献目録二—10）。

(10) Ponthieux (III–69), pp. 91–5.

(11) Chauviré (III–52), p. 37 n. 4.

(12) Baldwin (III–91), pp. 163–4.

(13) Démonomanie, II, 4, fol. 87; II, 7, fol. 104 v も参照。

(14) Chauviré (III–52), p. 77.

(15) Ponthieux (III–69), pp. 61–3.

(16) Ibid., pp. 68–70, 90–1.

(17) 一五八六年一一月九日付けのニコラ・ツルイヤール宛ての手紙（二—8）。

(18) De Republica, epistola.

イギリス訪問前から翻訳を始めていたことについては、更に八一年出版の『国家論の弁護』(Apologie, fol. 2:「彼の著作〔『国家論』〕の翻訳を始めた」) 参照。

(19) 詳細については、K. D. McRae, The French and Latin Versions of the République, in: McRae (ed.), The Six Bookes of a Commonweale (I–7. 44), pp. A 28–38 参照。

(20) De Republica, epistola.

(21) Ibid., I, 8, p. 86; II, 4, p. 201; II, 5, pp. 208–9; VI, 2, p. 672.

(22) République, VI, 5, pp. 993–4.
(23) De Republica, pp. 731–3.
(24) Ibid., VI, 1, p. 630.
(25) Ibid., III, 8, pp. 348–9.
(26) Ibid., II, 2, p. 193; II, 5, pp. 216–7; IV, 2, p. 409; V, 2, p. 531; VI, 5, p. 743.
(27) Ibid., IV, 1, p. 373.
(28) Ibid., III, 8, pp. 350–60.
(29) Démonomanie, I, 2, fols. 10 v–12 v; III, 1, fol. 123 v. これがボダン自身のことであることについては、《『国家論』、批判と反論》の註(11)参照。
(30) 一五八六年一一月九日付けのニコラ・ツルイヤール宛ての手紙。
(31) République, I, 3, p. 28; I, 4, pp. 29, 42.
(32) 一五八六年一一月九日付けのニコラ・ツルイヤール宛ての手紙。
(33) 出版本は二〇九番の成句で終っているが、これは印刷ミスで、一七八番が重複している。
(34) Epitome moralis, pp. 4–13.
(35) Ibid., p. 14.
(36) Ibid., pp. 15–17.
(37) Consilium, fols. A2v–A3.
(38) Ibid., fol. B2v.
(39) Ibid., fols. A4–A5v.
(40) Ibid., fols. A6v–B2v, B3v.
(41) Ibid., fols. B2v–B3.
(42) Ibid., fols. B5v–B6.
(43) République, VI, 1, p. 847.

第二章　リーグ支配の時代

熱烈なカトリックの首都パリでは、一五八四年末に、貴族のリーグとは別に都市のリーグが生まれ、一六人委員会の秘密結社が結成されていた（一六人委員会という名称は、ギーズ公暗殺後の八九年一月にパリ一六区に設立される公安委員会に由来するが、パリのリーグの指導部の総称であり、人数は一六名とは限らない）。[1] 法服貴族の会計検査官シャルル・オトマン（ユグノーのオトマンのいとこ）が異端の王をもつことへの恐怖と王権に対する全般的不満から、三人の友人、主任司祭のプレヴォ、ブーシェ、それにユグノーから再転回した教会参事会員ローノワと謀って結成していた。そして、その友人関係、とくに職場や家を通じた友人関係によって、初期のメンバーを構成していた。

レトワール、ド・トゥ、パスキエといったポリチークは一六人委員会を宗教的熱狂にかられて社会革命（いわく「民主政体」「アナキー」）をもくろむ下層民や犯罪者の集まりと決めつけたが、これは事実ではない。一六人委員会のメンバー自体が代表的なパンフレットの一つ『廷臣と職人の対話』で、社会の上層部、とくに帯剣貴族を貧しい人々の血を吸う蛭と激しく攻撃し、熱烈なカトリック教徒に代えるよう主張している所から、そうした決めつけも正しいように考えられたが、そのパンフレットは九三年九月頃まで書かれなかった。つまり、そのパンフレットは一六人委員会が社会の上層部の脱退を引き起し、貴族のリーグと対立して潰された後に書かれたものであり、その社会革命的主張はむしろ一六人委員会の時代が終っていたことの証しである。

確かに帯剣貴族は加わっていなかったし、一六人委員会は貴族に軍事的指導権は認めながらも、常に疑っていた。プレヴォの友人のオーヴェルニュの貴族デフィアはすぐに離れたし、ギーズ公が送り込んだ三名の貴族は連絡将校にすぎなかった。この点、一六人委員会はそもそも貴族のリーグとは別に形成されたものであり、ギーズ公、マイエン

ヌ公、更にはスペイン大使のメンドーサ、イバラとも関係をもち続けたが、彼らが自由に操作できるようなものではなかった。しかし、最高諸院の上級官職保有者や大商人から多くのメンバーが加わっていた。オトマンのいる会計検査院では、オトマンを継いで指導者になるラ・シャペル＝マルト、アカリが加わっていたし、それに高等法院長官ル・メートル、かつてのパリ市長で、ラ・シャペル＝マルトの義父たる租税院長官ヌイイ、会計官エヌカン、貨幣院の評定官ロラン、大評定院の評定官クロメなどがいた。最高諸院の上級官職保有者は大部分が保守的なガリカニズムの王権主義者で、サリカ法による王朝主義者であったが、こうした一部の者は異端の王をもつことへの恐怖と王権に対する全般的不満から、王権に反旗をひるがえしていた。香料商人ラ・ブリュイエール、ラシャ商人コンパンなど五名の大商人もいた。彼らは法服貴族か領地をもつ社会的地位の高い者であり、初期のメンバーとして解る五一名中一六名がこうした者たちであった。こうした最高諸院の上級官職保有者や大商人が加わった意味は大きい。法服貴族と大商人は血縁関係で結ばれ、共同で町を支配しており、しばしば市長や助役に選ばれ、市政に強い発言権をもっており、王権の市総督と市代官の任命による市政への介入の効果はむしろ法服貴族と大商人にかかっていたのであり、その一部たる彼らの反旗は王権の都市支配力を弱めるものであった。また、彼らこそ都市のリーグと貴族のリーグの結び目であり、彼らの脱退は両リーグの対立を引き起すものであった。彼らが指導権を握っている間は、一六人委員会は社会の下層部を加えるつもりはなかったし（職人や小商店主で加わっていたのは肉屋のギルベールとすず職人のポッカールの二名だけであった）、民衆は情念のままに行動し、略奪に走ると疑っていた。都市のリーグを広める任務を負った弁護士のアムリーヌには、「我々の運動が資産のある三身分の者で構成されるよう、財産と社会的地位のある人々、聖職者、地方貴族、裁判官職保有者、それに評判のよい豊かな商人」に働きかけるよう指示していた。

一六人委員会に最も多くのメンバーを出していたのは、パリ高等法院とパリ裁判所の弁護士・検事組合（バロー）と書記・執達（バソシュ）

吏組合であった。弁護士のドルレアン、アムリーヌ、検事のル・クレルク、クルセ、検察官のバー、ルシャール、書記のスノ、執達吏のミシュレ等々、五一名中二一名がこれら下級官職保有者であった。彼らは異端の王をもつことへの恐怖と王権に対する全般的不満以外にも、上級官職が少数の家に独占され、社会的上昇の道が閉ざされていることに非常な不満をもっていた。この野心的な下級官職保有者こそが都市のリーグの最大の担い手であった。下級聖職者（司祭、修道士）は初期にはブーシェ、ギュアンセートル等五名しか加わっていない。しかし、この法皇至上主義の熱狂的な下級聖職者は都市のリーグのもう一つの担い手であり、説教や聖行進で民衆に最も影響力をもっていたのは彼らである。この野心的な下級官職保有者と法皇至上主義の下級聖職者が連合して指導権を握ったとき、一六人委員会は社会の上層部の脱退を引き起し、貴族のリーグと対立し、社会革命的状況を生み出すことになる。

パリでは、異端の王をもつことへの恐怖に加えて、王権、及びそれに抵抗できない高等法院、市庁に対する不満が極度に高まっていた。租税は七九年のブロワの王令での約束に反して増え続け、タイユ税だけで七六年の七一二万リーヴルから八五年には一二五〇万リーヴル、八八年には一八〇〇万リーヴルにも増加し、その多くがパリ初め北フランスの都市に課されていた。献上金は強制され、パリ市庁は八五年に市庁債の利子から二〇万エキュ、八六年に四万エキュ、八七年には全市民から集めた二〇万エキュの献上金に応じていた。売官は増加し、高等法院は八六年に売官に関する二七の王令の登録を、国王臨席法廷によって強制されていた。そのなかの一王令は検事に官職保持のために四〇〇エキュの献上金を命じたものであり、俸給が支払われないうえに、献上金まで命じられた検事はストライキに訴え、売官をめぐるストライキは会計検査院、貨幣院、大評定院にも広がっていった。物価は八六、七年の凶作によって急騰し、穀物価格は倍にもなり、何千という貧民がフランス中から流れ込んでいた。アンリ三世は彼らを城壁の強化に就けたが、彼らに支払われる金はパリ市民からまきあげた金であり、八七年に入ると事態はますます悪化し、

パン暴動さえ起きていた。

パリ市民は彼らからまきあげた金がどう使われているか、見て知っていた。この時期アンリ三世は貴族のリーグの圧力を前にして、政治はもっぱら母親にまかせて、祈禱・贖罪生活に入っていた。アンリ三世の神秘的な祈禱・贖罪主義は極度に昂揚し、イエズス会士オジェの指導のもとに新たにヴァンサンヌに二つの信徒会を設立し、彼の信徒会や宮廷アカデミィを支配していたのは今やオジェの詩的・音楽的説教、宮廷詩人デポルトとデュ・ペロンの宗教詩、詩的・音楽的神学であった。しかし、アンリ三世は何事も長続きしなかった。カプチン修道士のいでたちで、腰に頭蓋骨のロザリオをつけ、エペルノン公、ジョワイユーズ公初め廷臣を引き連れて祈禱・贖罪生活、贖罪行進の日々を送ったかと思えば、ルネサンス宮廷そのままに、豪華な仮面舞踏会、バレエ、祝宴を開いて乱痴気騒ぎの日々を送り、廷臣に何万エキュもふるまった。あるときは、子供のように、廷臣とともにけん玉遊びをしながら往来を行進した。パリ市民はアンリ三世を軽蔑し、偽善者、無神論者と決めつけ、ヴァンサンヌの詩的・音楽的説教による反宗教改革を偽善者、無神論者、魔女の巣窟と攻撃していた。レトワールやパスキエといったポリチークの連中でさえアンリ三世の奇矯な行動を軽蔑し、腐敗した宮廷や官僚制を改革しないばかりか、増税、売官を続ける政策を批判し、今日の混乱の責任の多くをアンリ三世に帰していた。

こうした異端の王をもつことへの恐怖と王権に対する全般的不満を背景に、一六人委員会はオトマンを指導者に、左岸を担当するクルセとルシャール、シテ島を担当するコンパン、右岸を担当するラ・シャペル＝マルトとル・クレルクを加えた六名の執行部を形成し、勢力拡大を謀っていった。クルセが学生、バーとミシュレが船乗りと港湾労働者、ギルベールとポッカールが肉屋と肉職人、ルシャールが馬市に集まる商人、そして各人が各自の職場で支持者を拡大するようにした。司祭は説教と聖行進で、理論家はパンフレットで、異端の王のもとでのユグノー版サン・バル

テルミィの虐殺の恐怖をあおり、君主とその「ぺてんカトリック教徒」たるポリチークの廷臣、顧問に対する憎悪をあおった。この時期の代表的理論家ドルレアンは、イギリスやユグノー支配地域でカトリック教徒がこうむった（また、そう信じられた）恐るべき迫害の数々によって、異端の王のもとではユグノー版サン・バルテルミィの虐殺が不可避であることを論証した（『イギリスのカトリック教徒がカトリック教徒のフランス人に与える警告』八六年）。そして、王に今すぐ悪しきポリチークの顧問を免職し、代りのカトリックの王位継承者を指名して異端弾圧に立ち上らねば、貴族のリーグとともに武力抵抗に訴えると脅し、それをユグノーから取り込んだ武力抵抗権論によって正当化した（『カトリック教徒にリーグに加わるようすすめる勧告』八六年）。一六人委員会の働きかけは様々な恐怖による流言蜚語、例えばアンリ三世がナヴァール王にカトリック虐殺のために二〇万エキュ送ったとか、エリザベス、オラニエ公、ドイツ新教徒諸侯の軍隊がフランスに向ったとか、パリ近郊に一万のユグノーが隠れ、カトリック虐殺の時を待っているといった流言蜚語がとびかうなかで、すぐに成功し、すぐに数千の屈強な船乗りや職人を組織化した。

それに対して、トゥルーズの法学者ベロワがポリチーク側を代表して「似非・へぼ詩人」ドルレアン一派に挑んだ。彼はボダンの『国家論』の後継者たち、ボダンの立法主権論とそこに援用されていた王権神授説を結合して、王権神授説による主権論を展開したトゥルーズの法学者グレゴワール、グリモデ、ブラックウッドなどに従って、王権神授説による絶対君主政論の論陣をはった（『カトリック教徒の弁明』八五年、『誤った御節介』八六年、『国王の権威』八七年）。君主は直接神に任命され、地上の統治の全権を任された神の代理、地上の神であり、君主が意志する法律は神の代理たる君主が意志するが故に正しく、人民は神法によって、地上の神たる君主を崇拝して服従する義務を負っており、君主に対する反乱は神に対する反乱である。たとえ君主が異端であろうと暴君であろうと、それは神の問題であって、何の根拠もない法皇至上主義を唱える法皇や、政治的には服従すること以外に何の権限も与えられていない人民

には何の関係もないことである。彼はかかる神授説をサリカ法による王位継承法と結合して論じたが、地位としての君主だけでなく君主個人も聖化していた。そして、高等法院のレジストや高位聖職者を中心とするポリチークの多くの者が、ガリカニズムの王権主義、サリカ法による王朝主義の立場をとりながらも、「のらくら王」アンリ三世に対する不満や異端の、少くとも国民大多数の宗教に反する王をもつことに対する反対、それに個人的保身術から、積極的にリーグに反対しなかったり、中立的立場をとっていることを批判した。かつて人民主権の選挙王制論、武力抵抗権論を展開したナヴァール王の顧問デュプレシ＝モルネもポリチークの理論を用いて、王権神授説、ガリカニズム、サリカ法による王朝主義の論陣をはり、オトマンはデュプレシ＝モルネにせかされてガリカニズム、王位継承法の論陣をはり、八六年の『フランコ・ガリア』の改訂版はかつての理論との矛盾を露呈していた。しかし、かかる抽象的イデオロギーで具体的な異端の王をもつことへの恐怖や王権に対する全般的不満を取除くことは不可能であり、一六人委員会は弱体な王権にも助けられて、ますます強大化してゆく。

八七年に入ると、一六人委員会は執行部を六名から一二名に拡大し、三万人を動員できる（当時のパリの人口は二〇万から二五万人で、武器をとれるのはもちろんその半分よりずっと少ない）と誇れるまでに強大化していた。外には、オルレアン、ブールジュ、ナント、ボルドー、トゥルーズ、リヨンの熱烈なカトリックと同盟していた。こうした強大化した勢力を背景に、一六人委員会は陰謀を企ててゆく。八七年二月のメアリーの処刑は異端の王のもとでの虐殺を視覚化し、ほとんどすべての説教師をリーグ支持にし、民衆は恐怖による行動を起し、もはや民衆を抑えられず、君主の摘発を防ぐためにも、陰謀を企ててゆかざるをえなかった。二月から三月にかけて、当時パリにいたマイエンヌ公の承認はえたが、ギーズ公の承認なしに、王を捕える陰謀を企てた。バスチーユ、兵器庫、市庁舎、高等法院裁判所、パリ裁判所を占拠し、大法官シュヴェルニ、その義兄弟の高等法院首席長官アルレ以下王党派を殺し、そして「下層

民」による略奪を防ぐためにバリケードを築いてルーヴルを包囲し、王を捕える、というものであった。この陰謀はスパイのプーランの通報によって露見し、何人かのメンバーが捕えられたが、一六人委員会は民衆を動員し、パリ市長やマイエンヌ公を使って、更なる蜂起によって君主を脅した。アンリ三世は弱気になって、釈放した。

君主の弱さはますます明らかとなってゆき、一六人委員会はますます自信をつけてゆく。六月には、市会で一六人委員会のロランと熱烈なポリチークの理論家ベロワが激しく争い、二人とも逮捕されたが、リーグの圧力によってロランが数日後に釈放されたのに対し、アンリ三世とナヴァール王を熱烈に弁護したベロワの方はずっと投獄されたままであった。また、売官をめぐるストライキは検事から会計検査院、貨幣院、大評定院にも広がり、アンリ三世は弱気になって、六月に売官や王領譲渡の王令を強制することをやめた。七月にはエペルノン公暗殺の陰謀を企て、取消し命令にも拘わらず一部の者が実行に移したが、アンリ三世は何もしようとはしなかった。九月には、メアリー処刑以来公然と民衆に異端と君主に対する憎悪をたきつけていた説教師に優柔不断な態度をとり、説教師の逮捕という流言蜚語から二度の民衆蜂起があったが、アンリ三世は何もしようとはしなかった。またこの九月に、ギーズ公、オマル公と組んだパリ制圧の陰謀もあった。

アンリ三世は母親の妥協外交で失墜した（と、信じた）王の威信を戦場で取り戻そうとした。九月末にドナ男爵率いる二万数千のドイツ新教徒軍がフランスに侵入し、それに合流するためにナヴァール王率いる六〇〇〇のユグノー軍が北上してきた。アンリ三世はジョワイユーズ公を、持ちこたえることだけを期待して、多数の軍隊（二五〇〇の騎兵と五〇〇〇の歩兵）をつけてナヴァール王に差し向け、ギーズ公には、その敗北を期待して、少数の軍隊（二六〇〇の歩兵）しかつけずにドイツ新教徒軍に向わせた。そして、ギーズ公敗北後に東部戦線を立て直し、王の威信を回復すべく、エペルノン公指揮下の予備軍をとっておいた。しかし、結果は王の期待とは正反対であった。ジョワイ

ユーズ公はナヴァール王との戦争を求め、ペリゴールのクートラで完敗して、死んでしまい(一〇月)、それに対してギーズ公はドイツ新教徒軍をモンタルジの近くのヴィモリ(一〇月)、そしてシャルトルの近くのオーノで破った(一一月)。アンリ三世はギーズ公の完全な勝利を阻止し、勝利の名誉をエペルノン公に帰すために予備軍を派遣し、ドナ男爵と共謀のうえで、敗走するドイツ新教徒軍を安全にストラスブールに追い払わせた。戦争の結果はオーノの勝利者ギーズ公こそが国民の英雄であり、王の威信はどん底にまで落ちたが、アンリ三世はエペルノン公を勝利者として迎え、戦勝祝賀会を催し、そして自信をもって一六人委員会を脅していった。

八八年に入ると、王の処刑の脅しに対する恐怖からも、一六人委員会はますます陰謀を企て、非合法の軍事組織を整えていった。リーグの諸公も再びナンシーで会談をもち、寵臣を免職してリーグの諸公を異端との戦争に登用すること、トリエント公会議の決議のフランス導入などを求め、アルマダの側面援助のためにも、王に対し強硬な態度にでた。今やスパイのプーランはほとんど毎日報告を届けねばならず、アンリ三世はプーランの報告のおかげでどうにか陰謀を切り抜けている有様であった。一六人委員会は四月にギーズ公と共謀して、二四日のギーズ公の軍隊の到着と同時に蜂起するという陰謀を企てた。一六人委員会がバリケードを築いて、パリの町を制圧し、その手引きでギーズ公の軍隊が城内に入り、ルーヴルを占拠し、エペルノン公を殺し、王を捕える、というものであった。プーランの知らせを受けると、アンリ三世は親衛隊の四五人隊で身辺を固め、スイス傭兵を郊外に集結させ、エペルノン公を新たに地方総督に任じたノルマンディに去らせ、そしてギーズ公にパリに来ないよう警告した。しかし、ギーズ公は王の命令に従わない決意を固めており、カトリーヌが妥協工作を進めるためにパリに来るよう促すと、五月八日にソワソンを立って、翌日パリに入り、王の面前で民衆の熱狂的な歓迎をうけた。アンリ三世は非常な屈辱を味わったが、一部の顧問の進言やパスキエの嘆きにも拘わらず、ギーズ公を捕えようとはしなかった。ギーズ公も殺されるのでは

ないかと恐れていたが、アンリ三世もスペインを背後にもつギーズ公、パリ市民に疑心暗鬼で、一二日の明け方に国王軍を城内に入れた。

これが引き金となって、遂に五月一二日のバリケードの日が始まった。伝統的な反乱の拠点、左岸から蜂起が始まり、クルセと司祭のピジュナの指揮の下にバリケードが築かれ、たちまちパリ中にバリケードが築かれた。あらゆる階層の人々が蜂起し、「職人は道具を投げ出し、商人は商売を、大学人は本を、検事は書類袋を、弁護士はその制帽を投げ出し、長官や判事でさえ戟槍を手にとった。」パリ高等法院第六長官ブリソンのような穏健派カトリックの者まで蜂起に加わり、リーグについていなかった者で蜂起に加わったのは五万人にも達したという。蜂起の知らせに驚いたギーズ公はブリサク伯以下の従臣を送って民衆を指揮下に治め、カトリーヌと王の要請に従って、バリケードで分断された国王軍をルーヴルに移し、混乱の収拾に乗り出した。翌一三日には戦火はおさまり、カトリーヌはギーズ公との妥協工作にとりかかった。しかし、恐怖にかられたアンリ三世は夕方シャルトルに逃げ出した。この蜂起はギーズ公、ましてやメンドーサの指令によるものでは決してなく、サン・バルテルミィの熱狂が恐怖や全般的不満を背景に、一六人委員会の一突きによってよみがえったものであったが、これによってギーズ公と一六人委員会はパリを手に入れ、メンドーサはアルマダに対するフランスの障害がなくなったことをフェリーペに書き送った。

このバリケードの日に、ボダンはパリにいて、他の何人かの者たちとともに「異端」として捕えられたが、友人のパリ高等法院の弁護士で熱烈なリーグの支持者ドージェによって助けられた。[2] おそらく蜂起に加わらなかったがためと思われるが、[3] ドージェがボダンを助けたのは、ボダンをリーグの支持者、あるいは正統なカトリック教徒とみたからではなく、たんに友人としてであったろう。ドージェは後にリーグを支持したボダンを信用できず、友人を使って取り調べさせており、ボダンはそのことに神聖な友情に対する裏切りを感じ、激しい不満を表明している。[4] 後に、ボ

ダンは自ら目撃し、危険なめにもあったこのバリケードの日を、神がリーグを道具に使ってこの世に介入した最初の日、神が安息をもたらす聖なる数七年目（九四年）の平和まで続く内戦の最初の日と規定することになる。

今やパリを手に入れたギーズ公と一六人委員会はバリケードの日を、王の許可なしに勝手にカトリックを滅ぼそうと軍隊を導入したエペルノン公初め国王顧問に対する正当な武力抵抗であったと正当化し、ただちに支配・防衛体制の確立に入った。五月一七、一九日の市会で、市長にラ・シャペル＝マルト、助役にロラン、コンパン、それに商人のコトブランシュとデプレを選出し、パリ市庁を一六人委員会で固めた。一六人委員会が握った市庁は高等法院の市政への介入を排除して、パリ防衛の拠点バスチーユをル・クレルクに任せ、軍事長官（区軍事長官、五〇人区長官、一〇人区長官）を、積極的に選出に介入して、一六人委員会のメンバーかリーグ支持の官職保有者、商人に占めさせた。また、外からの攻撃に備えて、「パリ市民の名において」ヴァンサンヌ、ポントワーズ、ポワッシー、コルベイユ、ムーランといったパリ周囲の防衛拠点を占領し、ルーアン、サンス、トロワ、ランス、アミアンといった諸都市に相互援助同盟の手紙を送った。そして、ギーズ公と一六人委員会はカトリーヌ、それにヴァロワ家の実際の政策担当者ヴィルロワ、ベリエヴルと交渉に入り、七月にヌムール協定の改訂版の妥協に達し、要求のほとんどすべてをのませた。アンリ三世も七月に同盟王令（エディ・デュニオン）で屈し、リーグとともにユグノー弾圧にあたること、ナヴァール王アンリの王位継承権を否認し、それをブルボン枢機卿に認めること、トリエント公会議の決議をフランスに導入することを再確認し、この王令を王国基本法だとし、この王令に署名しない者を反逆罪だとした。リーグはこれに付随する一連の協定で、更に王から譲歩を引き出していた。ギーズ公には多くの都市が与えられ、国王軍全軍の指揮権が認められ、王国総代官の地位が約束され、リーグの諸公には地方総督の地位が約束された。ブルボン枢機卿には王位継承者として、王と同様にその補佐官に免責特権が認められ、フランス中の同業組合の親方の任命権が与えられ、ギーズ枢機卿

にはアヴィニョン法皇領、リヨンの大司教エピナクには国璽尚書の地位が約束された。一六人委員会には、彼らが無視することになる様々な条件がつけられたが、彼らのパリ市庁が認められた。それに、リーグが更に王から譲歩を引き出すべき三部会の召集が約束された。

政治の焦点は、九月一五日にブロワに召集される三部会に移った。ギーズ公は暗殺の危険をおかしてでも、アンリ三世に対する勝利をフランス全土とヨーロッパに宣言する晴舞台を期待した。一六人委員会は数多くのパンフレットを出し、王に悪しきポリチークの顧問を免職し、今すぐ「一つの宗教」の確立、財政と裁判の腐敗の是正、税の軽減と売官制の廃止から、魔女の迫害、賭博、売春、劇、贅沢、華美な服装の禁止まで全般的改革を行うよう、フランス滅亡の焦燥感をもって訴え、期待した。そして、八月にアルマダ敗北の知らせを受け、自信を回復したアンリ三世もこの三部会に多くを期待した。それは、前回の三部会のときのように、自らリーグの指導者になることによってリーグをぎゅうじり、その勢力を利用して財政再建初め地に落ちた王権再建を企てることであった。九月初めに、アンリ三世は突然、何の理由も告げずに、国務卿ヴィルロワ、財務長官ベリエヴル以下全大臣を解任し、パリ高等法院の弁護士モントロン以下あまり国政経験のない者たちに代えた。この突然の解任は、カトリーヌを遠ざけ、ヴィルロワをギーズ公と通じたと非難したように、これまでの王権失墜の責任をカトリーヌと彼女に信任された大臣たちの軟弱な妥協外交にみる怒りからであり、彼自ら王権再建に乗り出すためであったろう。それに、三部会の開会演説で彼らを攻撃するように、リーグから攻撃されている彼らにこれまでの失政の責任をすべて押しつけ、彼らをスケープゴートにするためであったろう。

三部会が一〇月にブロワで開かれると、代議員の圧倒的多数をリーグが占めていた。出席した代議員四一一名（第一身分一三四名、第二身分九六名、第三身分一八一名）のうち、貴族身分で折半しただけで、ほとんどすべてがリーグであ

り、各身分の議長は第一身分のギーズ枢機卿、第二身分のブリサク伯、第三身分のラ・シャペル＝マルトとすべてリーグであった。このことは身分間の対立を減じ、三部会を王に対する一致した圧力の場とするものであったが、それでもアンリ三世は前回のときのように三部会の操作にとりかかった。一〇月一六日の開会演説で、彼は同盟王令に従って異端を弾圧し、売官制初め必要な改革を行うことを宣言し、そして「余の権威のもとにあるリーグ以外のリーグはすべて」禁止し、それを企てる者を反逆罪として罰することを宣言した。しかし、リーグの諸公は憤って席を立ち、ブルボン枢機卿とリヨンの大司教は反逆罪の箇所の削除を求め、アンリ三世も屈した。また、聖職者身分と第三身分は同盟王令を王令ではなく、王国基本法だと三部会で誓約することを求め、アンリ三世は屈して、一八日に代議員の前で誓約した。それでも、三身分の代議員は王を疑い、一致して異端のナヴァール王の王位継承権の再否認、南部への侵攻、八七年の戦争でカトリック軍を裏切って、今はなき兄のコンデ公についたコンチ公、ソワソン伯、それにマチニョン元帥に対する制裁を求め、圧力をかけ続けた。第三身分はそれに、アンリ三世が最も期待し、リーグの諸公も戦争遂行のために協力せざるをえない、王の財政再建の問題で圧力をかけ続けた。不正に増額されているタイユ税を七六年の額にもどし、王の財政腐敗を正す「粛清法院」、つまり三部会主導の二四名の評定官（三部会の三身分から一八名、高等法院、訴願審査官、貨幣院から各二名）からなる、徴税請負人や徴税官に対する永続的な監査・裁判機関の設立を要求し、要求が入れられない限り、課税には応じられないし、ブロワから立去ると脅していた。

王権とリーグが同盟し、南部への侵攻を開始するのではないかというブロワからの脅威に対応して、ユグノーは一一月にラ・ロシェルで政治会議を開いていた。最初は内部で対立もあったが、王権とリーグの対立が深まったブロワとは反対に、ラ・ロシェルでは指導者の一人コンデ公の死も幸いして、ナヴァール王のもとに結束することが決定された。「第一位の王族にして、フランス改革派教会の保護者」ナヴァール王アンリこそ「われわれの至高の支配者」と

認められ、財源と官職任免権が与えられた。

ブロワでは、一二月に入ると、アンリ三世とギーズ公の実質上の王を決める「勝負」は抜き差しならないものになっていた。三部会が強圧的な態度をとり続け、屈辱を忍んでギーズ公に仲裁を頼んだにも拘わらず、第三身分が王の財政の問題で譲らないのは、ギーズ公が裏で糸を引いている証拠だとアンリ三世は信じた。また、サヴォワ公がイタリアにおける唯一のフランス領、ピエモンテのサルーツォを占領したという報告を一一月半ばに受け、アンリ三世はもちろんスペインと同盟するギーズ公がそそのかしたと信じたし、そのうえギーズ公がそれをユグノーとの戦争を避けるために王がそそのかしたという噂を広めていることに、二重の屈辱をうけた。それに、オルレアンにおけるリーグの総督アントラーグとリーグの市庁の対立が、前者はアンリ三世に、後者はギーズ公に訴えて、ブロワに持ち込まれていたが、これが秘密協定でギーズ公に与えられた都市「ドゥルラン Dourlans」をめぐる両者の対決となった。アンリ三世はそれをピカルディのドゥラン (Doullens) だと主張し、オルレアンを明け渡すよう迫り、ギーズ公はヴィルロワが故意にオルレアン (d'Orleans) を書き違えたものだと主張し、オルレアンに介入しないよう激しく迫った。結局仲裁に入ったカトリーヌの説得によって、アンリ三世は屈した。この屈辱が長年の積もり積もった屈辱感に火をつけ、アンリ三世は一二月二三日に四五人隊を使ってギーズ公を暗殺し、ブルボン枢機卿、ギーズ枢機卿、エルブーフ公、ギーズ公の妻子、ヌムール公の母と弟、それにリヨンの大司教、ブリサク伯といった数多くのリーグの諸公を逮捕した。また、宮廷裁判長、かの枢機卿の父リシュリューを市庁舎に送って、ラ・シャペル＝マルト、ヌイイ、コンパン、ドルレアンといったパリのリーグを逮捕した。翌二四日には、ギーズ枢機卿を暗殺し、兄弟の死体を切り刻み、焼いて、ロワール川に捨てさせた。

アンリ三世は勝ったと思った。「ギーズ公の問題はもはや片づきました」と母親に告げ、「今こそ余が王だ」と法皇

特使に書き送った。スペイン大使メンドーサもリーグは壊滅したと思った。三部会は何事もなかったかのように仕事を続け、王の行為の正当性を問題にする者はいなかった。しかし、カトリーヌはそうは思っておらず、病いの床で悲嘆にくれながら、法皇と都市に十分注意するよう息子に忠告した。リーグを潰すつもりなら、今こそナヴァール王と和解し、一気に軍事力で貴族と都市のリーグを潰すべき好機であったが、アンリ三世にはマキアヴェリズムを使いこなす才覚はなく、カトリーヌは年老いて死すべき病にふしており、和解を遂行すべきヴィルロワもマイエンヌ公に仕えて、いなかった。カトリーヌが八九年一月五日に死んだとき、誰もあまり喜びも悲しみもしなかったが、パスキエが恐れたように、彼女が長年「驚嘆すべき労苦」でもって守ってきた王権も死の宣告をうけていた。

パリでは、「暗殺者の暴君」に対する反乱が始まっていた。一二月二四日にギーズ公暗殺の知らせが届くと、パリは一六人委員会の戒厳令にも拘わらず、混乱状態に陥っていた。説教師は新しいヘロデに対する復讐を叫び、ギーズ公の壮麗な葬式が繰り返し行われ、教会には暗殺の場面を想像で描いた恐るべき絵が掲げられ、「アンリ・ド・ヴァロワ」を攻撃する膨大なパンフレットが出されていた。民衆はほとんど毎日、夜となく昼となく、この真冬に薄い白布をまとっただけで聖行進を繰り返していた。そして、王とその寵臣の彫像を破壊し、偽善者、無神論者、魔女の巣窟たるヴァンサンヌを襲い、魔女の証拠たる二匹のサテュロス像をもつ十字架を発見し、「アンリ・ド・ヴァロワ」を魔女と攻撃する数多くのパンフレットが出された。また、ユグノーやポリチークとみなされた者を何百人と投獄し、その財産を略奪していた。少し誇張癖のあるレトワールによれば、どんな理由からであれ、笑った者はそれだけでユグノーやポリチークとされ、危険なめにあった。

一六人委員会はギーズ公暗殺の知らせを受けると、ただちに区軍事長官に命じて戒厳令をしき、革命政権樹立を急いだ。一二月二五日の市会で、オマル公をパリ市総督に選出し、ヴィルキエを解任した。これは国王の任免権に対する挑

戦であり、高等法院首席長官アルレが市総督の任免権は君主だけのものであり、混乱時には高等法院が代行できるだけだと反対したが、脅して押し切った。そして、三身分からなる四〇人委員会（コンセイユ・デ・カラント）（聖職者九名、貴族七名、第三身分二四名）、すぐにマイエンヌ公によって貴族のリーグ支持の保守的な高等法院長官や司教を加えられて総評議会（コンセイユ・ジェネラル・ド・リュニオン）に改組される革命政権を樹立し、マイエンヌ公を王国総代官に選出し、革命を全国の都市に広めようとした。また、高等法院の勢力が強く浸透しているパリ市政を信用できず、四〇人委員会のパリ市政担当の下部機関として、民政を扱う九人委員会を設立し、実質的に四〇人委員会をぎゅうじる一六人委員会を公然と制度化した。一二月三一日の市会では、革命政権の財源として、パリではタイユ税を廃止して、税務官ロラン（貨幣院の評定官でパリ市助役のロランの弟）を最高責任者とする自発的献金制にし、パリ近郊の町は七六年の額か八八年の三分の二の額のタイユ税をパリ市に納めることにした。この自発的献金制は初めは非常に有効な制度であったが、すぐに財源不足から強制となり、金持ちに対する略奪の美名にすぎなくなってゆく。

一六人委員会が握る市庁はこれらの革命的行為の正当化をソルボンヌとパリ高等法院に求めた。ソルボンヌは法皇の権限を代行して答え、八九年一月一七日に七〇人の博士の満場一致で、国王のカトリック教と王国に対する裏切り行為によって、人民は即位の宣誓に際して負った服従義務から解放され、武力抵抗を行うことができる、と正当化した。ソルボンヌの博士ブーシェと「ロッサエウス」なる者はその決定を詳述するために、法皇至上主義のもとにモナルコマキの理論を導入したリーグの武力抵抗権論を代表する著作、『アンリ三世の正当な廃位』（八九年）と『キリスト教国家の正当な権威』（九〇年）の執筆にとりかかった。ブーシェはこう論じた。国王廃位権は教会と人民＝国家がもつ。キリスト教君主はキリストの代理たる法皇を頂点とするキリスト教共同体＝教会の一員であり、国王が宗教（ローマ・カトリック教）を破滅しようとするときには、法皇に代表される教会が国王を解任し、人民を服従から解

放する権利をもつ。また、国王は人民によって人民の福祉のために条件つきで設立されたのであり、国王が設立の条件に違反するときには、主権者たる人民＝国家の代表たる三部会が国王を解任し、人民を服従から解放する権利をもつ。教会と人民＝国家は協力しあうべきものとされているが、もちろん人的・自然的起源の国家より神的起源の教会の方が優位することが前提とされており、教会の判定だけで十分で、必ずしも三部会の判定は必要としない。ロッサエウスなる者はトミズムを受容して、こう論じた。国家は人民の福祉のために自然に生成したものであり、主権者たる人民は即位の宣誓に際して自らの福祉のために思い通りの制限を君主に課すことができ、君主はその目的や制限に拘束され、これに違反したときには、主権者たる人民は服従から解放され、誰でも暗殺の権利をもつ。しかし、あまり性急であってはならず、教会の判定を待つべきである。国家は単なる生活のためだけではなく、良き生活のために生成したものであり、君主は真の宗教の維持と異端の弾圧という目的に拘束され、これに違反したときには、キリストの代理たる法皇に代表される教会は人民を服従から解放する権利をもち、誰もが暗殺の権利、いや義務を負う、と。このように、彼らは叙任権闘争以来の聖俗二元論的法皇至上主義によってモナルコマキの武力抵抗権論に操作を加え、法皇至上主義の武力抵抗権論に作りかえた。一方で国家を世俗化し、人民主権の選挙王制論による世俗的理由からする抵抗権に限定し、他方で宗教的理由からする抵抗権はキリストの代理たる法皇のもとにある教会に移し、キリスト教普遍共同体の理念のもとに法皇至上主義を弁証した。こうした国家の世俗化、人民主権の選挙王制論、法皇至上主義はもちろんポリチークの王権神授説、サリカ法による王朝主義、ガリカニズムを排除するためのイデオロギーであった。これ以後リーグとポリチークの論争は法皇至上主義の武力抵抗権論対ガリカニズムの王権神授説を最大の争点とし、あたかもフィリップ四世と法皇ボニファキウス八世が争った一三世紀末から一四世紀初めに戻ったかのような観を呈することになる。

それに対して、パリ高等法院は一六人委員会の脅しにも拘わらず、その要請に応じようとはしなかった。ポリチークの拠点たるパリ高等法院は分裂し、一部の者が異端の王をもつことへの恐怖とアンリ三世に対する不満からリーグにはしり、多くの者がそれとガリカニズムの王権主義、サリカ法による王朝主義の間で引き裂かれて中立の立場をとっていたが、首席長官アルレ以下多くの者がまだ、宗教問題のないアンリ三世支持の王党派であった。一月一五日に高等法院の一部の者が首席長官アルレの家に集まり、予審部長官ル・メートルがブロワから持ち帰った王の手紙、ギーズ公、ギーズ枢機卿の暗殺を正当化し、パリの蜂起を非合法化する命令の登録を企てているのを知ると、翌一六日に一六人委員会はバスチーユの指揮官ル・クレルク率いる一団で高等法院を襲い、アルレ以下二二名の王党派の者をバスチーユに投獄した。そして、「パリ市及びその他の同盟都市のカトリック教徒」の名において、第六長官のブリソンを首席長官に選出し、弁護士長に投獄した予審部長官の息子のル・メートルとブロワで囚われのドルレアンを、検事総長に投獄した高名な裁判官モレを選出した。この一介の検事による正義の殿堂襲撃は非常な衝撃を与え、高等法院の裁判官はその多くが順次王が移したトゥール、シャロンに逃げ、残った八五名の者はデュ・ヴェール、ピトゥ、レトワール、モレ、それにブリソンなどその多くが、状況が好転するまでリーグ支持を装わざるをえず、リーグを正当化し、同盟王令への誓約を諸都市に求めていった。

四〇人委員会はソルボンヌとパリ高等法院の決定をそえて、同盟王令への誓約を各都市に求め、二月の初めまでに主要なカトリックの都市のほとんどすべてがリーグについた。パリ防衛にとって重要な拠点では、ルーアン、ボーヴェ、サンリス、モー、ムーラン、シャルトル、オルレアンといった町々、東部ではアミアン初めピカルディのすべての都市、ランス、トロワ、ディジョンといった町々、中央部では、ル・マン、ランヌ、ナント、ポワチエ、ブールジュといった町々、南部ではアジャン、トゥルーズ、マルセイユ、エクス、アルルといった町々がリーグについた。国

王側に残されたのは、ロワール川流域のトゥール、ブロワ、オモン元帥が再征服したアンジェ、マチニョン元帥守るボルドー、オルナノ元帥守るドフィネの町々だけであり、リヨンも三月にリーグについた。

こうしたフランス中の都市でのリーグ支配はランの町、パリから北東に一三二キロ程（当時馬で二日の行程）離れた、人口一万にも満たないイル・ド・フランスの地方都市だが、リーグの諸公の拠点たる東部を結ぶ、またパルマ公のネーデルラントとパリを結ぶ要衝の町ランにも及び、ボダンはリーグを支持することになる。以下、王党派のラン徴税区の税務官アントワーヌ・リシャールの覚書[5]、それにリーグによって出版されたり、筆写されたボダンの手紙[6]によって、ランにおけるリーグ支配の時代のボダンの思想と行動をみてゆこう。

ランの町では、ブロワの三部会に派遣されていたサン・ヴァンサン修道院長ド・ビュイイ、ヴェルマンドワ初審裁判所長官ドフェール、それに裁判官のルグラが八九年一月二〇日に帰ってくると、すぐにサン・ヴァンサン修道院長とドフェールを指導者に（実質的指導者はドフェール）、リーグの秘密委員会（コンセイユ・スクレ）が結成された。（彼らは帰途パリに二週間あまり滞在しており、彼らがブロワで見た血なまぐさい事件によって状況が圧倒的にリーグに有利に展開していることを知ったであろうし、また一六人委員会がぎゅうじる四〇人委員会と接触をもったであろう。）既にこれ以前に中・下級聖職者による教会のリーグが形成され、説教や聖行進によって多くの民衆をリーグ側につけていたが、教会のリーグからその軍事指揮者であった教会参事会員ボワロ、それに司教裁判所長官ボセ、教会参事会員のクレペル、ドレトルなどをメンバーに加えていた。守備隊では、既に多くの隊長と守備隊兵がリーグ側についていたが、その隊長の一人ブランシュをメンバーに加えていた。また、ドフェールと親戚のテュレ、ユベール、それにドランシ、ドラメールの四人全員の区長官をメンバーに加え、その下に大部分の百人区長をリーグ側につけていた。それに、ドフェ

ールが長官を務めるヴェルマンドワ初審裁判所のルグラ、デピノワ、ヴェロンといった少数の、しかし指導部を形成する裁判官もいた。これ以外に、すぐに中立的立場をとったり、離れる者に、ランの公爵＝司教デュグラや地方貴族のロクールがおり、ランの秘密委員会は明らかに、パリの一六人委員会の指令に忠実に、階層の高い者を集め、三身分の構成にしようとしていた。

ランの秘密委員会は最初はもっぱら上・中級聖職者と市政担当者の連合であった。市政担当者は大部分が秘密委員会につき、自治の伝統に立って王権、及び王権を代行する君主任命の市総督（貴族）と代官（第三身分）に反旗をひるがえしていた。主要な市民選出の市政担当者では、一二名の市参事全員、四名の区長官全員、それに一二名中八名の百人区長が秘密委員会につき、秘密委員会が市政を握ったときには二名の助役と四名の百人区長しか更迭する必要がなかった（ランの町には市長職はない）。国王官職保有者で秘密委員会に加わったのも大部分が同時に市政担当者でもある者であった。ドフェールは市会の議長でもあり、ルグラは市参事でもあり、国王弁護士のテュレは区長官でもあった。秘密委員会のもう一つの支柱は教会であったが、しかし教会のリーグとの関係では、秘密委員会は遅れて来て、その上層部を取り込んだものであり、必ずしも十分な民衆的基盤をもっておらず、熱狂的な司祭や民衆の様々な分派活動と対立することになる。リシャールは秘密委員会を下層民、借金にあえぐ者、食いつぶし、犯罪者の集まりと決めつけたが、ランの秘密委員会はパリの一六人委員会以上に民衆的基盤をもっておらず、熱狂的な民衆の運動と対立するものであった。秘密委員会にとって司祭や民衆の分派活動より危険であったのは、国王官職保有者であった。国王官職保有者は有力商人と血縁関係で結ばれ、共同で町を支配しており、しばしば市政担当者に選ばれていたし、たとえ選ばれなくても、名士として市会に出席し、発言する権限をもっていた（パリでは社会の中層部にすぎない国王検事や弁護士も、ランのような地方都市では社会の上層部であり、名士として扱われた）。こうした市政に強い発言権をもつ国王官職保

有者が大部分秘密委員会に加わらず、リーグを支持することもしなかった。秘密委員会が市政を握った後でも、王党派の国王官職保有者が二〇〇名もいた、とボダンも述べている。(7)

二月に入ると、秘密委員会はドフェールを指導者に、ボワロ、テュレ、ルグラ、ブランシュなどを執行部に、説得によって支持者の拡大を謀り、支持者に武器を手渡し、その訓練に一〇数名の兵隊を城内に入れた。パリからは三名の使節が派遣され、大量のリーグのパンフレットが持ち込まれた。そして、司祭や修道士、とくにフランシスコ会士の説教師ジャコブは公然と暗殺者の暴君、魔女の暴君「アンリ・ド・ヴァロワ」に対する憎悪と反乱をあおり、民衆は聖行進を繰り返し、一部の守備隊兵と民衆は武装して「現実主義者(レアリスト)」と呼ぶ王党派の国王官職保有者を襲い、昼も夜も騒いでいた。もはや住民の三分の二、あるいは四分の三がリーグ側についている、とリシャールにはみえた。こうした強力な勢力を背景に、また抑制のきかない民衆対策からも、秘密委員会はランにおけるバリケードの日、「民衆の情念」対策からバリケードを築き、国王権力を代行する総督と代官、それにリーグに反対する国王官職保有者を捕え、市政をぎゅうじる陰謀を急いだ。

それに対して、ランの総督ド・マルリと代官マルタンは何の手もうとうとはしなかった。市政に発言権をもつ国王官職保有者も大部分は中立を標榜し、動こうとはしなかった。彼らはリーグを支持することはしなかった。オマル公やカンブレの総督ド・バラニからリーグにつくよう手紙をうけたが、無視した。パリの総評議会の指令やパリ高等法院の二月四日の決定に従って同盟王令を受け入れよという検事総長の命令も、無視した。ボダンもリーグを疑い、「これほど重大な問題については、よく考える必要がある」と主張していた。首席長官以下多くの者が投獄され、パリ高等法院の決定に手続上の問題が残ること、リーグはパリ高等法院を襲うという「ひどい不法行為」によって、故意に内戦を起こそうとしているのではないかという疑いが残ること、それに君主に対して、たとえ暴君であろうと、

「自然の愛情」をもっており、王がリーグと和解し、「全世界の花」パリを破滅させない努力をする期待が残ること、これがその理由であった。[8] しかし、彼らは国王側として動くこともしなかった。国王軍の指揮官ロングヴィル公からリーグを逮捕し、ランの町を国王側に確保せよという手紙を繰り返しうけたが、無視した。ランの郊外には国王側のカルダイヤック男爵の千数百の軍隊がおり、一部の熱烈な王党派の者はカルダイヤックと連絡をつけていたが、それでも無視した。彼らは、リシャールが激しく攻撃するように、恐怖にとりつかれていた。「ポリチークで疑わしいカトリック教徒として通っていた」[9] ボダンも「最たる王権主義者（レガリスト）」と攻撃され、襲われた経験をもち、「最も強力な党派につかなければ、すべてを失ってしまう」、生命や自由、財産を失ってしまうのではないかという恐怖にとりつかれていた。[10] 彼らの臆病さを激しく攻撃し、ランの町にリーグ支配を招いた責任を告発するリシャールとて同じであり、後に平和がもどった時代に『覚書』のなかで威勢のよい言葉を弄しただけであった。彼らは正当性が分裂した状況、そして、モンテーニュのいう、決断が危険を招く状況で、何の行動もとれず、不安のうちに、何かが訪れてくれるのを待っていた。

王党派の支配者の軟弱な態度に秘密委員会は自信を増し、カルダイヤックの軍隊が郊外から去った二月一六日の夜から翌一七日の朝にかけて蜂起した。一六日の夜半、城内に多くのユグノーが結集し、代官マルタンと組んで、町をカルダイヤックの軍隊に明け渡し、「熱烈な良きカトリック教徒」虐殺の陰謀を企てているという情報を流しながら、テュレ、ボワロ以下秘密委員会の執行部は各々三、四〇名の従者をつれて捜索を開始し、町の要所をおさえた。彼らは、彼らの期待以上に、すぐに民衆が武装して騒ぎだしたのに恐れ（民衆は夜間では略奪の混乱を引き起すから）、民衆を抑え、バリケードを築かせながら、夜明けを待った。そして、ノートル・ダム大聖堂の鐘の音を合図に、サン・ヴァンサン修道院長の激励の言葉を受けて、彼らは総督を長官ドフェールが指令を送っていた王宮に拉致して軟禁し、総

督の承認のもとに、代官以下二五名のリーグに反対する王党派の者を陰謀のかどで王塔に投獄した。この二五名の囚人は国王官職保有者二二名、市政担当者四名、商人一名で(国王官職と市政の両方を兼任しているのが二名いる)、もっぱら弁護士・検事組合、書記・執達吏組合に所属する国王官職保有者(一八名)であった。また、弁護士や検事など数名の国王官職保有者はランの町から逃げてもいた。ドフェールは王塔を訪れ、今こそ、激しいルサンチマンで憎んでいた義兄弟のマルタンを倒し、自分が町の支配者になったことを確認した。

民衆が投獄者の虐殺を叫び、牢獄襲撃を試みる混乱のなかで、市政を握った秘密委員会は区長官のもとに戒厳令をしき、支配・防衛体制の確立を急いだ。四人の区長官と守備隊長ブランシュのもとに戒厳令体制を続け、彼らの許可なしに夜間外出したり、城外に出たりすることを禁止し、いつでも家宅捜索ができるようにした。総督は二〇名の監視兵をつけて司教館に監禁し、二五名の囚人は守備隊によって監視し、その裁判はルグラ、デピノワ、ヴェロンで固め、その裁判正当化のためにパリ高等法院からコミセールを招くことにした。市政担当者の選出には積極的に介入し、首席参事をルグラで固め、二名の助役と四名の百人区長をラシャ商人のシャトラン、ブロンデル以下秘密委員会支持者に代えた。また、新たに市会の下に各百人区から三名ずつの四二人委員会を設け、多くはリーグ支持者で固めた。外からの防衛では、貧民を城壁の強化に就け、守備隊を四隊、四八名に編成変えし、新たに六〇名の軍隊を設けることにした。そして、市政に必要な財源は、タイユ税を廃止して(減額の決定がなされるまでという条件つきでだが)、必要に応じて課される自発的献金によってまかなうことにし、その責任者にルグラ、ボワロ、百人区長ブロンデルをあてた。四八名の守備隊の費用(日に八エキュ)は囚人の財産でまかなうことになったが、パリ高等法院のコミセールを招く費用四〇〇エキュ、そのために弁護士オルベールをパリに派遣する旅費一五エキュ、城壁強化の費用一〇〇エキュ、六〇名の軍隊の費用月に二〇〇エキュ、しめて七一五エキュが早速課された。

しかし、肝心かなめの、代りの総督を選出し、リーグにつく宣言を発することには失敗した。サン・ヴァンサン修道院長はギーズ公配下の旗手で、ギーズ公の死後領地に帰っていた地方貴族ブシァヴァンヌをおしたが、司祭や民衆の間に強力な党派を築いていた町の有力者の商人ラビッシュ、ブシァヴァンヌの兄弟が国王軍にいることを理由に、ラビッシュの激しい反対にあい、押し切ることができなかった。その機会は、三月に入るとランの周囲にもたれこめ始めた戦雲によってもたらされた。マルルに拠るカンブレの総督バラニ、イル・ド・フランスの戦場に野心をかける、あのユグノー虐殺で有名なモンリュックの私生児が八〇〇の騎兵と三〇〇〇の歩兵を率いて、(ビュシ・レ・)ピェールポンで自滅状態のカルダイヤックを破ってラン地方に入ってくることが明らかになった三月中旬に、秘密委員会は何よりもバラニの軍隊に対する恐怖から、リーグにつく宣言を急いだ。

三月二一日にランの町は市民総会を開き(これは臨時の市民総会である。正規の市民総会は年一回、復活祭の日に開かれる)、リーグにつく宣言を行った。町のすべての四辻でらっぱが吹き鳴らされ、ノートル・ダム大聖堂の前に司教以下全聖職者、長官ドフェール以下全官職保有者、それに全市民が正装して集うなかで、フランシスコ会士が「ヴァロワの暴君」に反乱し、すみやかにリーグにつくことを求める説教を行った後、市民総会が開かれた。まず、長官ドフェールが演説を行い、他の都市とともにリーグにつき、「アンリ・ド・ヴァロワ狩り」に加わるよう勧告した。その後で、ボダンが「公共・王国の検事であって、王の検事ではない」という資格で、同盟王令を受け入れるように勧める演説をした。[11]

ボダンはこれ以前の三月一九日、パリ高等法院の三月一日の決定に従って同盟王令を受け入れよという検事総長の二回目の命令を受けた日には、リーグ支持に態度を変えていた。アンリ三世がリーグと和解し、カトリックたる国民を守ろうとするどころか、ナヴァール王に接近しているのを知って、「アンリ三世は人民すべてを守るどころか、自分

のために滅ぼす目的しかもっていない」と、最終的にアンリ三世に幻滅していた。そして、急いでパリ高等法院の命令に従うよう、司教やドフェールに説いてまわっていた。その関係で秘密委員会に依頼され、ボダンが市民総会で演説を行うことになった。ボダンは住民相互の疑心暗鬼を取り除き、虐殺を防ぐために、「人民の救済が最高の法 salus populi suprema lex esto」という最高規範に従って、リーグを支持するよう勧告した。そして、フランス全土が王権に対して反乱しており、フランス全土の反乱を罰することは事実上不可能であり、従って「全体の反乱は反乱とは呼べない」から、リーグを支持しても反逆罪を恐れる必要はないと論じた。更に、この反乱はその原因が君主の側の不法にあり、「フランスの最も強固な守り」高等法院、それに「法皇と枢機卿会議によって権威を与えられている」ソルボンヌによって支持されており、正当であると論じた。[12]

王党派のリシャールはボダンの演説を「まったく長たらしくて混乱し」、「まったく聞くに耐えない」と憤慨し、ポリチークたる「彼の良心に反して」、臆病さからリーグにおべっかを使ったものとみなし、記録にとどめる必要を認めなかった。しかし、ボダンが慎重にパリ高等法院首席長官ブリソン宛ての手紙では触れなかった、演説の最後の場面は記録に残す必要を認めた。ボダンは最後に、前夜二五名の囚人を虐殺しようと牢獄襲撃を試みたリーグの熱狂分子に対する攻撃に移った。しかし、ボダンを絞首刑にせよという激しい怒号が起り、演説を続けることは不可能であった。[13] サン・ヴァンサン修道院長のとりなしで混乱がどうにかおさまった後に、まず名士が身分と地位に従って順番に、それから全市民が一緒に同盟王令に誓約した。それを祝って、大砲をうち、花火をならし、楽器をひき、テ・デウムを唱和しながらの聖行進が繰り返され、翌日から全住民の文書による同盟王令に対する誓約・署名もなされ、こうしてランの町はリーグについた。

ボダンは四月四日の市民総会でも、王党派の囚人を裁くために招かれたパリ高等法院の三名のコミセール（予審部

長官ルジュエールと評定官のデトラプ、ドラクール）歓迎の演説を依頼され、混乱を引き起した。まず、コミセールの代表たる予審部長官ルジュエールが、法と正義が国家の支柱であること、彼らが囚人を裁くためだけでなく、ラン及びラン地方の法と正義全般を扱うためにパリの総評議会から派遣されて来たこと、そしてマイエンヌ公とともに、暴君のアンリ・ド・ヴァロワとすべての異端を追放し、「カトリック教徒の間で確保される平和」を実現するよう訴えた。その後で、ボダンが現在の状況について「長々と」論じ、マイエンヌ公とパリの総評議会を称え、三名のコミセールの長旅をねぎらい、そして将来の王権再建のために尽力して下さるよう祈ると、ボダンを異端だと糾弾する激しい怒号が起り、演説を続けることは不可能となった。[14] こうして、ボダンはリーグからは王党派と疑われ、王党派からはリーグと疑われ、「スペインの城」のように訪れる人とてなく、孤立してしまい、[15] ますます内面への亡命を強いられ、神と神の法の貫徹した自然の瞑想のうちに心の安らぎを得ようと、神学、倫理学、自然学の著作に専念した。

ボダンがリーグを支持したのは、何よりもまず、それが状況の「強制的必要（ネセシテ・フォルセ）」だからである。リーグの秘密委員会が市政を握り、民衆が王党派の疑いある者を襲い、そして恐るべきバラニの軍隊がランの町に入って、王党派を略奪、虐殺することが明らかとなった状況では、「最も強力な党派につかなければ、すべてを失ってしまう」ことは明らかであり、リーグを支持することが「どうしても必要」だと思えた。「最たる王権主義者」と攻撃される自分だけでなく、「現実主義者」と攻撃される二〇〇名にものぼる王党派の官職保有者の生命や自由、財産も危険にさらされており、それを防ぐためには自ら率先してリーグを支持し、彼らもリーグ支持に態度を変えさせることがどうしても必要だと思えた。そして、かかる状況では、リーグを支持することも、「人民の救済が最高の法」という最高規範、あるいは「強制的必要は決して人間法の追求に服さない」という例外規範によって許されるのではないかと思えた。これは国王官職保有者でも、官職は主権者に帰属するものではなく（主権者は任免権をもつにすぎない）、国家＝王国に帰

属するものであり、[16] 君主個人にではなくて「祖国(パトリ)」に仕えれば良いのであって、[17] 問題はないと思えた。そのうえ、フランス中の都市が既にリーグを支持し、ボルドーを除く他の高等法院がすべてリーグを支持しているだけでなく、最も権威あるパリ高等法院がリーグを支持するよう命じてきたことは、ますます彼の良心に安心感を与えるものであった。[18]

リシャールはボダンがポリチークたる自己の良心に反して、状況の強制だけからリーグを支持したと考え、その臆病さ、そしてそれによる「二つの水を泳ぐ」態度を激しく批判した。リシャールは、ボダンが秘密委員会から王党派と疑われながらも、その偉大な著作家、偉大なポリチークの理論家としての名声を、多くの官職保有者をリーグにつけるべき「くるみ落し棒」として利用され、その利用価値の故に安全を保障されていることを——熱狂的な司祭や民衆からは、そうした利用価値などお構いなしに、激しく攻撃されていたが——、鋭く見抜いていた。後にベイルも、プロテスタントたるボダンがリーグを支持したと驚きを表明しているド・トゥに従って、ボダンがプロテスタントたる自己の良心に反してリーグを支持したと考え、再びカルヴァンの教義に戻ったかのように、ボダンを敵よりも仕末に悪い「ニコデモの徒」と激しく批判している。そして、リシャールはボダンの事例を「聡明な人とて常に完全な判断をするわけではない」「人間の判断力の弱さ」の教訓とし、リーグを支持して偉大な著作家、偉大なポリチークの理論家としての名声を失うよりは、ランの町から逃亡すべきであったと批判した。[19]

確かにリシャールの批判はあたっていよう。ボダンがリーグを支持したのは、何よりもまず、状況の強制からであり、そこに理由づけた弁明は、如何にそれに誠実であったとしても、臆病さや恐怖心の正当化でもあろう。生命がかかった状況での臆病さは殉教精神の欠如しか意味せず、これはポリチークに一般的な態度であり、リシャールもランの町から逃亡せず、リーグを支持したとはいえ、ボダンの場合には理論家としての責任は残ろう。

しかし、ボダンがリーグを支持したのは状況の強制だけからではない。パリに残った高等法院の者たちもボダンと同じ批判にさらされていた。それに対して、パリ高等法院の最も激しいリーグ攻撃者デュ・ヴェールや穏健なブリソンは病気の父や自分と家族の生命の安全を理由にパリから逃亡できない旨弁明し、たとえリーグを支持しても、それは状況の強制による表面だけのものであり、パリに残った方がより王に貢献できると弁明していた。これはボダンが『国家論』で、反乱が強力で、鎮圧できる見込みがないときに、国王官職保有者がとるべき態度として勧めていた対応でもあった。[20] しかし、今や、ボダンにはこうした発想はない。ボダンがランの町から逃げることを考えた形跡はまったくないし、アンリ三世に貢献する気などまったくなかった。ボダンはリーグの理論や目的に同意したわけでは決してないが、状況の強制による表面的以上にリーグを支持していた。この相異を生みだしたのはアンリ三世に対する態度である。ポリチークも多くの者がアンリ三世の奇矯な行動を軽蔑し、腐敗した宮廷や官僚制を改革しないばかりか、増税、売官を続ける政策を批判し、今日の混乱の責任の多くをアンリ三世に帰していたが、アンリ三世を暴君と規定する者はまずいなかった。宗教の問題のないアンリ三世の場合には、モンテーニュが言うように、たとえ王に値しなくても、法律が尽くすべき王と党派を決定していた（『エセー』一巻三章、三巻一章）。ところが、ポリチーク最大の理論家ボダンは既にラテン語版の『国家論』で、アンリ三世が神の報復を受けるべき暴君であり、アンリ三世が神法・自然法に違反して統治していることに神は怒り、報復として宗教戦争を起しているのではないかと考えていたが、ここに遂に明確にそう規定した。

ボダンは旧約（ヨブ記とサムエル記）を権威に、神によって裁きに決定された君主の指標を、その人民と官職保有者から畏敬の念が奪われて、まったく見捨てられること、それにその君主と顧問の判断力が奪われて、ひどく馬鹿げた統治を続けることの二点に見出した。アンリ三世の統治はまさにこの二点に合致しており、アンリ三世が犯した売

官、淫蕩、魔術、宗教を装う偽善、それにブロワでの公的信義違反と殺人といった罪のために、神は怒り、遂に直接この世に介入し、直接の責任者たる君主だけでなく、国民全体に報復を開始したと考えた。[21]

「私はここにより高い、より普遍的な原因をみます。つまり、神が王や大領主を罰し、その後継者が正しく歩むよう恐るべき実例を示し始め、そしてそれを継続することを決意したということです。……王杖は神の御手次第であり、神がいつ、誰に王杖を与え、奪うかは御心次第です。[22]」

「戦争はもう五年続き、王公や貴族はその大部分が死に、都市は互いに襲われ、あるいはその住民自身によって苦しめられるでしょう。何故なら、神が地上に正義を実現しに、天上から降りてこられたからです。最後には、神が御心のままに我々に王を与えて下さるでしょう。[23]」

「すべてをよく、十分に考察した結果、かかる事態は神の真の裁きであることが解りました。それは……フランス全体に対する裁きであり、王や諸公から始まりましたが、互いに襲われないような都市、要塞や城、村や村落は一つもないということになるまで続くでしょう。いつも反乱、殺戮、争い、反目が繰り返され、最も身分の高い者から最も低い者まで誰もが襲われ、財産を奪われるでしょう。……この戦争はもう五年終わらず、大部分の貴族がこの戦争で死にたえ、国力は驚くほど弱まり、弱体化することになるでしょう。そして最後に、常にわが王国を愛し、決して見捨て給わない神が御心のままに、人間が考えるのとはまったく別の王を我々に与えて下さるでしょう。[24]」

ボダンは八八年のバリケードの日を神の最初の直接介入だと考えた。それ故、自らも危険なめにあったバリケードの日が「喜こばしいバリケードの日」なのである。「喜ばしいバリケードの日（多くの者は憎んでいるが）は急激な奔流のようにパリの最たる塵芥どもを追っ払い、すべての町を荒らしまわる宮廷の強盗どもや害虫どもに追撃をかけた。」そして、神の報復たるこの戦争はバリケードの日から（数えで）六年目（九三年）まで続き、六年目に平和の前ぶれとなる大変革が起き、神が安息をもたらす聖なる数七年目（九四年）に神の平和がもたらされる、と予言した。[25]

また、ボダンは直接の責任者たるアンリ三世が神の報復によって「近々、不可避的に」死に、ヴァロワ家が終わる

ことを予言した。このことは数の学からも確認され、アンリ三世はフランク最初の王（と、当時信じられていた）ファラモン以来六三番目（六三＝七×九）の王であり、これは王個人にとっても王国にとっても厄年であった。[26] そして、アンリ三世が暗殺され、予言が成就すると、「王の死は人間の裁きによるものではなく、神の御手による」とし、「狡猾で危険な暴君」、ネロやカリギュラのような暴君の死を神に感謝し、アンリ三世が『国家論』の警告を無視したことを嘲けることになる。[27] アンリ三世の王位継承者については、ボダンは神の御心次第だと考えたが、とにかくナヴァール王アンリ以外の者だと考えた。リーグがナヴァール王の王位継承に反対しているのは、「神に対する恐れをもっていない」ナヴァール王の王位継承に神が反対していることの表われにすぎない、とボダンには思えた。[28]

このように、ボダンは神の報復という観点からのみ状況を判断しており、――従って、その認識方法は神に選ばれたごく少数の知恵者にのみ可能な予言である――、リーグはこの恐るべき正義の神の道具、死刑執行人にすぎず、神の正義がこの世に実現されるまでの間受け入れざるをえない、耐えるべき存在であった。神の報復という観点は一方でアンリ三世だけでなく、神の正義の欠如した人間の現実一般に対する激しい批判に駆り立て、他方で状況追随にし、状況がリーグに有利なのは神がリーグを神の正義の欠如した人間に対する鞭、死刑執行人として使っているからであり、リーグのやることはすべて、バリケードの日であれ、アンリ三世の暗殺であれ、神の報復の行為として正当化させた。

八九年三月二一日にリーグにつくと、秘密委員会が握るランの市会は外からの防衛体制確立を急いだ。ド・ピュイゾー指揮する五〇名の軽騎兵とデュ・メニル指揮する三〇名の火縄銃騎兵からなる軍隊を作り、ランにつくよう命ずる文書を持たせて、ラン地方の町と領主のもとに送りつけた。四月八日にバラニの強力な軍隊がラン地方に入ってク

レピの町や農村で略奪と暴行の限りを尽くすと、その作業も順調に進み、バラニがオマル公の待つサンリスに向けて立つ一八日までに、ラン地方のクーシやすぐに再び国王側につくクレピの町を除くほとんどすべての町、ヴェルマンドワ地方監督官ラ・ボブ初め多くの領主がランについた。そして、軍隊のために必要となった多大な金（軍隊の前払い金一二五〇エキュ、各兵に月々一〇エキュ、それにバラニの軍隊を養った多大なパンとブドウ酒）はますます、自発的献金という美名の「金持ちに対する略奪」、逃亡した住民の財産没収、修道院の世俗財産没収、それにランにつかない町や領主に対する略奪に頼っていった。

ランの町のバリケードの日以来、秘密委員会はますます司祭と民衆を抑えることができなくなっていた。民衆は説教師ジャコブの激越な説教に熱狂し、毎日司祭や修道士とともに聖行進を繰り返していた。そして、リシャールが「醜悪なるルシフェル」と恐れる守備隊兵クルトなる者を指揮者とする武装集団や様々な武装集団を作り、総督と二五名の囚人の虐殺を企て、彼らの破門の儀式をとり行ない、王党派の疑いある者を監視し、その財産を略奪し、ある場合には教会の牢獄に投獄したり、虐殺することまでしていた。リシャールのような金持ちは危険で、彼は「誰も信用できない時代」「この不幸な時代」を嘆きながら、用心深く毎日聖行進に加わり、その時々に五〇エキュ、六〇エキュと課される自発的献金という名の略奪に応じていた。ボダンも四月二八日に、下級執達吏のジャンなる者によって嫌疑を受けた。ランの町がリーグにつく以前の一月二八日に、アンリ三世の名前のもとに作成していた訴状の釈明を求められた。それに対して、ボダンは「かつてのフランス王兼ポーランド王アンリ」の権威によって命令を発したことは一度もなく、王国総代官マイエンヌ公の権威によって命令を発しており、訴状を書き変えると釈明し、許された。[29] 民衆の間に強力な党派を築いていたラビッシュやクルトはそれだけでなく、長官ドフェール、司教、サン・ヴァンサン修道院長初め秘密委員会のメンバーも「疑わしい者」として激しく攻撃していた。官職を自分たちの間で独占

し、囚人をいつまでも処刑せず、王党派の疑いある者を厳しく追及せず、その兄弟が国王軍にいるブシァヴァンヌを総督に据えようとし、四月一九日には彼らの襲撃によって危険になった総督を安全にその領地まで送りとどけたことに対する不満からであった。また、疑わしい者を一網打尽にすべき、スペインの異端審問の導入の主張が入れられない不満もあった。四月末には、彼らは秘密委員会のメンバー初め四、五百名の王党派の疑いある者のリストを作成し、再バリケードの日を訴え、秘密委員会と武装して対立するまでになっていた。

五月八日に、ラ・ヌーの軍隊がスダンに結集し、ランの方に向っているという知らせが届くと、ランの町におけるリーグの内部対立は外からの脅威によっておさまった。パリ高等法院のコミセールの仲裁で和解がなり、翌九日に共通の敵に協力してあたること、それに違反する者には一〇〇エキュの罰金を科す旨、町のすべての四辻に張り出された。再び激しい戦争が始まろうとしていた。ブロワの行為の思わぬ結果に茫然自失していたアンリ三世も、マイエンヌ公が妥協の交渉に応じないばかりか、トゥールに近いシャトールノまで侵攻し、民衆蜂起と呼応してトゥール占領の機会をうかがっているのを知ると、ナヴァール王と和解する以外に道がないことを悟った。ナヴァール王も三月四日の宣言で、アンリ三世に和解の可能性を示唆していた。こうして、四月三日に和解の同意がなり、ナヴァール王はユグノー軍をアンリ三世に仕えさせ、それと引き換えに、デュプレシ＝モルネがその総督に任命されるソミュールの町を手に入れた。四月三〇日に二人の王がプレシ＝レ＝トゥールで会見し、遂に和解が成立し、連合軍はパリに向けて進撃を開始した。ロングヴィル公とラ・ヌーはオマル公、オマル公の後任のパリ市総督メーンヴィル、それにバラニが包囲する、再び国王側についたパリ防衛の拠点サンリスに向けて進撃し、モンパンシェ公はマイエンヌ公、ブリサク伯のいるノルマンディに向けて、コリニーの息子のシャチヨンはシャルトルに向けて進撃した。そして、その後をアンリ三世、ナヴァール王の主力軍がまっすぐパリに向けて進撃を開始した。今や、主力軍は国王顧問サンシが連

れて来た一万数千のスイス、ドイツ傭兵を加え、多くの貴族も国王側について、三万にもふくれ、軍事状況は逆転していた。

二門の大砲に守られた丘の町ランでは、市会は城壁の強化にあたり、そのための金二〇〇エキュを市民に課し、ラ・ヌーの軍隊に呼応して内部からの反乱が起きないよう、二五名の囚人と疑わしい者の監視を強めた。激しい対立のあった総督には、防衛体制確立の必要から、ラビッシュがおれて、ブシァヴァンヌを招くことにし、オマル公、マイエンヌ公にその任命を嘆願することに決まった。そして、五月一一日にラ・ヌーの軍隊がランの町を素通りし、ロングヴィル公の待つラ・フェールに向うと、リーグの戦勝祈願の説教と聖行進が繰り返された。しかし、サンリスの戦いの結果は、まず一九日に、戦場となったサンリスの近くの村から流れてきた百姓によってもたらされ、リーグ軍の敗北と解った。翌二〇日には正確な知らせが届き、メーンヴィルは死に、オマル公、バラニは負傷し、リーグの大軍が潰走したことを知らされた。サンリスでの敗北、それに続く強大な国王軍のパリ接近の知らせはリーグ、とくにその国王官職保有者たる指導部を恐怖に陥れた。リーグの指導部は「もはや時は失なわれた」と信じ、長官ドフェールは秘密委員会の集会を禁止し、パリ高等法院のコミセールは二五名の囚人を釈放し、パリに帰ることを主張し、市会は王党派の疑いある者の財産没収を禁止し、一八名の囚人の釈放を認め、残りの代官マルタン以下七名の囚人もパリに連れて帰ることを認めた。それだけでなく、五月二九日には指導者たるドフェールが親戚の国王官職保有者たちとともにランの町から逃げ出してしまった。その後に、厳しい監視体制がしかれたにも拘わらず、数名の国王官職保有者が続き、憲兵司令官つき警吏や守備隊、軍隊からも脱走者が続いた。先にリーグについたクレピやクーシの町、ヴェルマンドワ地方監督官ラ・ボブや地方貴族も国王の処罰を恐れて国王側につき、ラ・フェールの町とともにランに敵対した。国王側に攻撃されていたリーグの町マルルからは援軍を求めてきたが、援軍を送るどころではなかっ

た。民衆は相変わらずジャコブの説教に熱狂し、司祭や修道士とともに聖行進を繰り返し、市会の命令を無視して疑わしい者を襲い、その財産を略奪して競売に付していたが、指導部はもはや機能しなかった。

ボダンもランの町が防衛上の有利さにも拘わらず国王側に征服され、生命や自由、財産、官職を失なうだろうと恐れていた。[30] しかし、国王側につくつもりはなく、リーグの拠点パリ、その銀行業と淫乱さのために危険だが、神に対する恐れ、貧しい者・不具者に対する慈悲、公正な正義の三点で神に守られ、決して征服されないと信じた町パリに逃げることを考えていた。[31][32] ボダンは決して状況の強制だけからリーグを支持したのではなかった。

もはやアンリ三世の勝利は確実だと思われた。サンリスでの勝利に続いて、シャチヨンはシャルトルの近くのボーヌヴァルでサヴェーズの軍隊を破り、ノルマンディではモンパンシエ公がブリサクの農民軍を破り、多くの貴族が国王側につき、マイエンヌ公が逃げ帰ったパリの町は四万の国王軍が包囲していた。一六人委員会が握るパリの町は、逃げ腰で、頼りにならないマイエンヌ公にいらだち、食料欠乏に悩まされながらも、慎重なレトワールまで含む三〇〇名ものポリチークを投獄し――ポリチークの方も、それがリーグに協力しなかったことの証しになるとして、喜んで投獄されたが――、二四時間防衛体制で持ちこたえていた。しかし、パリが陥ちるのは時間の問題であり、それは武力を用いずにパリをとりたいとする二人の王の意図によって遅れていたが、遂に七月末にパリの武力征服が決定された。この知らせにヒステリー状態の城内から、一人の若いドミニコ会士が、バスチーユに投獄されている高等法院首席長官アルレの手紙をもって王のキャンプを訪れ、翌八月一日にアルレの秘密の伝言を伝えると称して王と二人だけになると、ナイフで切りつけた。ドミニコ会士クレマンはその場で切り殺され、火刑に処され、その灰はセーヌ川に捨てられたが、ヴァロワ家最後の王アンリ三世はその傷がもとで八月三日に死んだ。パリ中がこの知らせに狂喜した。奇跡が起った。暴君が死に、リーグは救われた。説教師はかの神の霊感を受けた殉教者を称え、殉教者の肖像は

市中にあふれ、モンパンシェ公夫人は殉教者の母親と思われる百姓女に祝宴をはった。ブーシェは書きあげたばかりの、アンリ三世に対する武力抵抗権論が実現されてしまったことを知り、急いで異端のアンリ・ド・ナヴァールに対する議論を付け加え、ロッサエウスなる者はアンリ三世暗殺の興奮のうちに、誰でも教会が異端と宣告しているアンリ・ド・ナヴァールを暗殺する権利、いや義務をもつと論じた。

アンリ三世の後を継いだのはアンリ三世とは対称的な、ユグノーのナヴァール王アンリであった。アンリ三世が人生を苦しむ繊細な教養人、反宗教改革に深く魅せられた修道士だとすれば、人生を楽しむ野育ちの騎士、カルヴィニズムにあまりとらわれない政治家のナヴァール王アンリであった。アンリ四世は八月四日に即位の宣言を発し、ポリチークの支持をとりつけるために、カトリックを保護し、宗教問題解決のために六カ月以内に全キリスト教国宗教会議か全国宗教会議を召集することを約束した。ラ・ヌー、シャチヨン、デュプレシ＝モルネは王のもとに残ったが、ラ・トレモワールは、ガリカニズムのカトリックに接近し、ユグノーには支配地域でしか礼拝の自由も官職につく権利も認めない王に疑いと不満を抱き、ガスコーニュとポワテュの軍隊を連れて去っていった。カトリックの大貴族は、国王の改宗を条件に、モンパンシエ公、ロングヴィル公、コンチ公、ビロン元帥、オモン元帥と残ったが、エペルノン公、ヌヴェール公、国璽尚書モントロンは異端の王のもとから去っていった。行政府のあるトゥールでは、いとこのヴァンドーム枢機卿が異端の王を認めないアンリ三世の廷臣やカトリック教徒と「第三の党派」を作り、王位をねらう工作を始めていた。アンリ四世は、モンテーニュが見抜き、ユグノーが疑っていたように、改宗して国民と和解する用意はあったが、今内外のプロテスタント勢力を失うことは自殺行為であった。エリザベスはただちに二〇万ポンドの銀貨、七万ポンドの火薬と弾薬、それにウィロビィ卿率いる四〇〇〇の軍隊を送ることを決定していた。四万もいた国王軍は半分に減ってしまい、アンリ四世は八日に七〇〇〇の軍隊を率いて、イギリスの援助を受けにデ

ィエップへ向けて出発し、残りの部隊はドイツからの援軍に道を開けるためにシャンパーニュに向けて出発させた。

国王側が分裂したならば、リーグ側も分裂した。マイエンヌ公は王国総代官として、八月五日に、囚われのブルボン枢機卿をシャルル一〇世と宣言し、過去にこだわらずカトリックの再統合を訴えた。しかし、年老いた囚われのシャルル一〇世（翌九〇年五月八日死亡）が当座の飾りであることは誰の目にも明らかであり、リーグの諸公は行動を開始した。アンリ三世の義兄にあたるロレーヌ公はヴェルダン、トゥールを占領し、息子のアンリに王位を求め、それが駄目でもシャンパーニュを手に入れようとねらった。アンリ三世の叔父にあたるサヴォワ公は王位を主張し、プロヴァンスに侵入してきた。アンリ三世の義弟たるメルケール公はブルターニュで独立の公国をつくろうとした。そして、アンリ三世の義兄にあたるスペインのフェリーペ二世は、ネーデルラントとフランスの両面作戦でネーデルラントを失うことを恐れるパルマ公や国王顧問イディアケスの反対を押し切って、フランスに直接介入することを決定した。フェリーペは大使のメンドーサを通じて、シャルル一〇世生存中は自分をフランス王国の保護者に任命すること、そしてシャルル一〇世死後、娘のイサベルと結婚するフランスの公爵を王位につけ、婚資金としてフランドルとフランシュ・コンテを与えることを申し入れてきた。しかし、八五年にナヴァール王アンリの破門と王位継承権否認を行った法皇シクストゥス五世はすぐにスペインの勢力強化を恐れて、リーグに対するてこ入れをやめ、法皇特使ガエターノ枢機卿を送って、アンリ四世に改宗し、フランスに平和をもたらすよう説得させた――ベラルミーノを伴ってパリにやって来たガエターノの方は法皇の命に反して、リーグにてこ入れするが――。同じくスペインの勢力強化を恐れる、イタリア唯一のルネサンスの残光を残した自由都市国家ヴェニスも法皇の保護のもとに、カトリック国で唯一アンリ四世を認め、法皇とアンリ四世の仲介にあたろうとした。

そして、パリでは、一六人委員会とマイエンヌ公の対立が表面化した。一六人委員会は、もともと兄ギーズ公のよ

うには人気がなく、太りすぎで、動作の鈍いマイエンヌ公に不信感をもっており、パリの金を浪費して軍事的敗北続きで、高等法院を拠点とするポリチークを弾圧しないことにますます不満を募らせ、スペインに接近しだした。シャルル一〇世の即位によって再び王権の機関となったパリ高等法院は王権による秩序回復に乗り出し、王権に対する破壊分子と考える一六人委員会に対決し、九月に、王権の承認なしに勝手に集会をもち、財産を没収し、襲撃・投獄することを禁止する決定を繰り返した。しかし、一六人委員会は彼らのメンバーが捕えられれば高等法院を脅して釈放させ、一一月には高等法院長官ブランクメニルを投獄し、見せしめに社会階層の低い五〇名近くのポリチークを処刑し、パリを支配しているのが彼らであることを見せつけた。そして、一六人委員会はマイエンヌ公にポリチークの拠点たるパリ高等法院を粛清して、「熱烈な良きカトリック教徒」たる彼らに代え、全般的ポリチーク粛清のために彼らからなるかつての火刑裁判所「粛清法院（シャンブル・ド・ジュスティス）」の設立を求め、スペインとの同盟の強化を求めた。マイエンヌ公は、一六人委員会とパリに対する恐れからその不法行為には目をつむったが、シャルル一〇世の即位によってもはや反乱者の指導者ではなく、国王代理であり、一六人委員会の統治への介入を認めるつもりはなく、一二月に総評議会を廃止した。

暴君に対する「天の一撃」と異端の「ベアルン人」退散の知らせが八月一〇日すぎに届くと、ランの町は歓喜し、祝宴をはった。リシャールのようなリーグに反対の者も、疑われないように祝宴に加わり、笑った。ボダンは彼の予言が成就すると、「狡猾で危険な暴君」の死を神に感謝し、アンリ三世が『国家論』の警告を無視したことを嘲った。[33]

アンリ三世の王位継承者については、ボダンはブルボン枢機卿（シャルル一〇世）を支持した。これは神の介入という観点からではなく、またリーグの理論に同意したからでも決してない。確かにボダンはカトリック教徒たることが伝統であり、それだけが諸公と都市の支持を可能にし、平和をもたらすことを重視したが、カトリック教徒たるこ

とが王国基本法だとか、三部会がカトリック教徒たる新しい王を選出できるなど、認めるつもりはなかった。ましてや、フィリップ四世がボニファキウス八世に勝利した三世紀近くも昔に解決済みだと考える、[34] 法皇至上主義による介入など認めるつもりはなかったし、また、サリカ法の枠をはずして、アンリ三世から（女系で）何親等かを論ずるリーグの諸公の主張など認めるつもりはなかった。ボダンにとって、王位継承の王国基本法はあくまでもサリカ法に基づく法的制度であり、王位は父系で最も近い男性、兄弟では長子に、世襲権によって（相続権ではなく、従って分割できない）自動的に帰属するものであった。そして、問題の叔父と甥ではどちらが優先するかという点については、既に見たように、ボダンはラテン語版の『国家論』でこう解決していた。直系の世襲の場合には、一応ローマ法の代父世襲権の概念を使う法学者の多数意見に従って、長子の息子たる甥が優先する。しかし、傍系の場合には、父がもっていない権利の代父世襲権などありえず、その一族の長が世襲するのであり、従って父系で何代目かが問題で、叔父は常に甥より一代早いので、叔父が優先する、と。ブルボン家の王位継承は傍系の場合であり、従って聖王ルイ（ルイ九世）から何代目かが問題であり、ブルボン枢機卿は「一三代目」（実際は九代目）、ナヴァール王アンリは「一四代目」であり、ブルボン枢機卿が王位継承権をもつものであった。代父世襲権論によってナヴァール王の王位継承権を主張している連中は、ボダンによれば、「法と理性をまったく無視して、彼らの宗教の公爵を王位につけ、もって利益や昇進を期待している」輩であった。[35]

但し、ボダンも年老いた囚われのブルボン枢機卿（シャルル一〇世）が当座の飾りにすぎないことを知っていた。そこで、ブルボン枢機卿が世襲権を放棄し、聖王ルイから同じ「一三代目」のモンパンシエ公（ルイ二世）、ボダンが七六年のブロワの三部会で会い、その寛容王令の存続と平和の主張に好感をもったモンパンシエ公が王位を継承することを期待した。ブルボン枢機卿が死ねばナヴァール王アンリが王位を継承することになり、リーグの総評議会も

モンパンシエ公に同意するのではないかと考え、その旨ブリソンに書き送った。しかし、モンパンシエ公が既に死んでいることをその後知り、平和の機会が遠のいたことを嘆いた。[36]

かくして、ボダンにとって、当座の飾りたるブルボン枢機卿（シャルル一〇世）の後は困難な問題となり、神の介入と王国基本法の二つの観点に引き裂かれていたようだ。一方で、マイエンヌ公をシャルルマーニュのような、神の保護をうけた「宗教と国家の保護者」と称賛し、マイエンヌ公が三部会で王に選出されれば、それを神託として受け入れる用意があった。他方で、ナヴァール王アンリが改宗し、諸公や都市と和解して平和をもたらすならば、受け入れる用意があった。[37] しかし、誰が王位を継ぐかよりも、とにかく内戦が終結し、平和が訪れることの方に関心が移っていた。神の報復という観点からのみ現実をみていたボダンも、直接の責任者たる暴君アンリ三世に対する神の報復が終った以上、神の正義の実現という観点は弱まり、それと同時に外国、とくに世界最強と恐れるスペインの介入に注目することによって、内戦に強い危機意識、平和への強い願望を抱きだした。九〇年前半には、無断で出版された手紙にふれて、こう書いている。「もしそれらの手紙がこのまったく残酷な戦争に正しくて幸わせな解決策をもたらすのであれば、私は書くことしかしないでしょう。インクがなくなれば、私の血で書くでしょう。[38]」そして、「外国人の餌食」になるのではないか、君主政体の再建が不可能になるのではないかと、ますます危機意識を募らせてゆくことになる。

ランの町は暴君に対する「天の一撃」に歓喜していたが、しかし、リーグの指導部は解体状況で、金はなく、軍隊は一四、五人の騎兵しか残っておらず、危険な状態にあった。ボダンもランの町が防衛上の有利さにも拘わらず、国王側に征服され、生命や自由、財産、官職を失うだろうと恐れ、パリに逃げることを考え続けていた。ランのまわりでは、国王側につくクレピ、ラ・フェール、ショーニ、クーシ、サン・ゴバンといった町とリーグ側につくランス、

ソワソン、ヴァイイ、マルル、ピェールポンといった町が、各々の町で四、五〇名の軍隊をもって小競合、略奪合戦を繰り広げていた。八月二一日には、ランの町はクレピの軍隊指揮官ラ・フーコディエールの襲撃を受け、郊外が略奪され、それに対してランの軍隊と守備隊兵は農民を加えた九〇数名で城外に打って出たが、一〇数名が殺され、二〇数名が負傷し、四〇数名が捕虜になった。

ランの町は防衛・臨戦体制の再建を急いだ。秘密委員会の指導部が八月末に、逃亡した指導者ドフェールの後任の地位と市代官の職を求めて混乱を引き起す野心的な裁判官ルグラを抑えて、区長官のテュレ、ユベール、裁判官のルグラ、デピノワの集団指導制によって再建されてから、作業は順調に進んだ。（野心的なルグラは集団指導制に我慢がならず、最高指導者の地位と市代官の職を求めてテュレ、ユベールと対立を引き起し、秘密委員会不満派の指導者ラビッシュの娘と再婚し、マイエンヌ公に取り入って勢力強化を謀り、混乱を引き起し続けるが。）秘密委員会が握る市会は総督ブシァヴァンヌの下に三〇〇名の火縄銃守備隊を作り、城壁に近い家を強制的に取壊し、そして、金の欠乏のために、メニル指揮下の六〇名の軍隊（かつては八〇名いた）を再興し、略奪合戦に加わっていった。九月中旬以来、ランのまわりでは慢性的戦争状態となり、国王側の町とリーグ側の町が小規模な略奪合戦を繰り広げるだけでなく、各々連合して四、五百の軍隊で大規模な略奪合戦を展開していた。一〇月一六日にはピェールポンの町が国王側連合軍に征服され、一八日にはラ・フェールの町がリーグ側連合軍に征服され、略奪・暴行の限りが尽くされた。ランの公爵＝司教デュグラ、ヴェルマンドワ地方監督官ラ・ボブ、総督ブシァヴァンヌの兄弟ムシーなど数多くの地方貴族が領地を守るために、休戦協定を結ぶよう働きかけたが、「ポリチーク」と攻撃されるだけで、効果はなかった。

そして、市会は民衆と協力して、軍隊のために必要となった金の調達と疑わしい者のしめつけにあたった。初めの頃は有効であった自発的献金もこの頃ではあまり効果がなく（俗人八〇〇エキュ、教会八〇〇エキュの自発的献金を課したが、

教会は拒否し、俗人からもほとんど集まらなかった)、市会は再び逃亡した住民の財産没収を決定し、疑わしい者も最初の警告で五〇エキュの罰金、二回目で追放と財産没収と決定し、民衆がそれを勝手に執行し、疑わしい者を投獄し、その財産を没収した。とくに、ディエップの近くのアルクの戦いでのマイエンヌ公敗北の知らせが届き(一〇月一二日)、ピェールポンの町が国王側に征服された(一〇月一六日)後に厳しく執行され、用心深いリシャールを含め五名が投獄され、二名が追放され、その家具が一人四、五〇エキュで競売された。また、八月末以来長官ドフェール初め多くの逃亡した官職保有者が生活苦から、マイエンヌ公のカトリック再統合の王令に従って、ランに戻ることを希望してきたが、市会は認めず、逆にその財産を没収し、ドフェールは三〇〇エキュまきあげられた。それでも金は足りず、軍隊は略奪集団、物だけでなく、身代金一人五、六〇エキュまきあげるために住民も略奪する集団と化し、お互いに敵の町の近隣の農村を荒らしていた。ランの町では取り入れや交易が困難なためにすべての物価があがり、冬に近づくと木材と木炭の値上がりがひどかった。市会は一一月一九日には、マイエンヌ公に八〇〇〇エキュまでの貨幣鋳造権を認めてくれるよう訴えることを決定した。

一二月九日に、有能な説教師を求めるランの町の求めに応じて、トゥルーズ生まれのためル・トロザムと呼ばれるイエズス会士が数人の助手を連れて、パリからやってきた。このイエズス会士は背が低く、藪睨みで、風采のあがらない三五歳位の男であったが、トゥルーズ高等法院の弁護士で、自称神学博士でもあり、あらゆる学問に通じた博学で雄弁な男であった。ル・トロザムはランに着くとただちに行動を開始した。ランに着いた翌日から説教を始め、一六人委員会とポリチークの対立が激化していたパリの事情そのままに、神聖なリーグに反対し、異端の暴君を支持する「この忌まわしい廷臣、ポリチーク」の摘発、虐殺を訴えた(「廷臣 maheurtre, maheustre」という言葉は、おそらく廷臣の服装の詰め物に由来する、アンリ四世支持者、ポリチークに対する蔑称)。また、サン・ニコラ修道院で助手とともに子供の

教育にとりかかり、文芸とカトリック教理問答を教え、大人、とくに婦人のために黒衣贖罪信徒会を設立し、毎日朝晩ミサをあげ、毎週聖行進を行い、それを新しい聖歌や多くのローソクで荘厳なものにした。彼は彼の荘厳な礼拝で神の啓示を受ける少女にはその啓示をとき、悪魔に取りつかれた娘には悪魔祓いをやった。こうして彼は司祭と民衆の心を捉え、翌九〇年一月には「予言者」「聖人」と呼ばれるようになり、今やルグラとの婚姻関係によって秘密委員会にも足場をもったラビッシュの党派と結合して、強力な党派を築いた。ランの総督ブシァヴァンヌは、秘密委員会とさえうまくゆかなかったのに、ル・トロザムのファナティックな党派が強力になったのを見て嫌気がさし、一月末にダルシを後任につけて領地に帰ってしまった。

ボダンは九〇年一月二〇日頃に、このイエズス会士のおかげで危険なめにあった。ル・トロザムは彼のやり方にボダンが反対しているというアダム・ジローなる者の訴えに基づき、ボダンの処罰を考えたが、「ボダンの名声」を慮って、ボダンが禁書、とくに魔術に関する禁書を数多くもっており、かかる瀆神を許すことはこの町に神の怒りを招くことになろう、と裏から秘密委員会に働きかけた。ボダンは捕えられ、審問をうけ、家宅捜索をうけた。家宅捜索の結果、魔術に関する本が発見され、彼が『魔女論』で勧告していた通りに、[39]家の前で燃やされた。これは「ひどいスキャンダル」となった。また、「現下のフランス王兼ナヴァール王」としたアンリ・ド・ブルボンの家系図も発見されたが、幸いボダンの自筆ではなく、家宅捜索の間に自分に恨みをもつ者が入れたのだと言い逃れた。（出版された一五九〇年一月二〇日の手紙もこのとき発見され、押収されたものであろう。）こうして、ボダンはどうにか犠牲になることを免れ、今後リーグに反対するようなことをすれば死刑にすると言い渡されて、釈放された。[40]ボダンはこの事件で生命の危険を感じ、九二年にイエズス会士ポセヴィーノによって「異端」と断罪されることと相俟って、イエズス会に激しい憎悪を抱くことになる。

ランのまわりでは、冬の間小康状態にあった略奪合戦が二月末から再開され、市会は疑わしい者をしめつけ、軍隊のために必要となった六〇〇エキュの金、二〇樽のブドウ酒、二〇アネの小麦を強制的にまきあげた。三月に入ると、クレピの軍隊が郊外に出没し、国王軍に追われたバラニの軍隊が郊外で略奪・暴行の限りを尽くして去り、そして何日間も槍の形をした彗星が天に輝き続け、ランの町は恐れた。そこへ、パリ西方のイヴリでのマイエンヌ公とエグモント公率いるスペイン軍の連合軍大敗の知らせ（三月一八日）、パリ近郊の町占領の知らせ（四月八日）、そして国王軍パリ包囲の知らせ（四月一八日　実際の包囲は五月に入ってからだが）が届くと、ランの町は恐怖におののいた。ル・トロザムは異端のベアルン人、それを支持するポリチークの「廷臣ども」を攻撃し、神に守られた神聖なリーグの方が勝利し、すぐに援軍が来ると励ます説教を繰り返し、荘厳な聖行進を繰り返した。市会はラン地方の農村の穀物をすべてラン城内に運び込むことを命じ、そして逃亡した住民の妻、それに異端のベアルン人のことを良く言う者、シャルル一〇世を王と認めない者を追放し、その財産を没収することを決定し、実行した。ランの町の恐怖は三月三一日にマイエンヌ公の将軍で前のパリ市総督ローヌ、そして四月九日にオマル公がランに現われると鎮まった。しかし、今度は秘密委員会内部の対立、秘密委員会と貴族の対立をもたらした。ローヌはランの町に二八〇〇エキュの援助を求め、ルグラはそれに尽力して、マイエンヌ公からランの代官に任命され、ルグラについていた何人かも官職をもらった。これは秘密委員会内部に激しい嫉妬をもたらし、とくにルグラと区長官のテュレの激しい対立を生み出した。テュレは他の区長官とデピノワの同意のもとに、秘密委員会でルグラの反対を押し切って、ルグラを治安判事から解任することを決定し、また四二人委員会を廃止し、各聖堂区一名ずつの一二名と秘密委員会の一二名で二四人委員会に代えることを決定した。四二人委員会の廃止の理由は公職の経験のない「下層民」も選出され、その連中が市会で騒々しく主張するということであり、ルグラと気脈を通ずるル・トロザム、ラビッシュの党派の者を市会か

ら排除し、ルグラの勢力を抑えることがねらいであったろう。それに代わる一二名の選出は介入と混乱のうちになされ、結局一二名中一〇名はかつての四二人委員会のメンバーであった。また、ランの町は先にマイエンヌ公から許可が出、ボダンも承認を求められ、署名した[41]貨幣鋳造を四月九日から始めたが、オマル公からそのうち六〇〇〇エキュをまきあげられることが解ると、その材料たる教会や修道院の銀器が集まらないのを放置し、オマル公は怒って、四人の金銀細工師を投獄した。ランの総督ダルシはオマル公と組んで、軍隊を城内に入れ、市政の実権を秘密委員会から奪おうと企てたが、テュレ率いる四人の区長官と争いを起した。こうした対立、混乱は四月二六日にマイエンヌ公がヴィルロワ以下顧問と七、八百の騎兵を連れてランを訪れると、公の仲裁でどうにか鎮まった。

六月に入っても、マイエンヌ公は十分な金も軍隊もなく、かといってパルマ公の介入を促すでもなく、一万五〇〇〇の国王軍に包囲されたパリ救出に向う気配を見せなかった。彼はただパルマ公の介入を待ちながら、地方の小競合、略奪合戦に従事していた。六月三日からは、七、八百の騎兵と二〇〇〇の歩兵を率いて、ラン地方の国王側の町クレピ攻略に従事した。クレピの町は六月一三日に占領され、ランの住民も加わって略奪・暴行の限りが尽され、町は破壊され、あらゆる種類の略奪品の市がランの町でたった。マイエンヌ公はこのクレピ占領によってランの町から二〇〇〇エキュをまきあげ――ランの町はマイエンヌ公の軍隊のために一〇〇アネの小麦、一〇〇アネの燕麦、七〇樽のブドウ酒も提供していた――、更にランのまわりの幾つかの町から攻撃しない代償金六〇〇エキュずつをまきあげると、六月一九日に他の地方の小競合に従事するためにランから去っていった。

パリでは、事態はますます悪化していた。一六人委員会とパリ市総督ヌムール公率いる五千のイヴリ敗残兵と五万の武装住民の英雄的な闘いによってどうにか持ちこたえ、五月八日のブルボン枢機卿（シャルル一〇世）の死以来アンリ四世に接近しだしたポリチークの陰謀も抑えこんでいたが、物資は底をつき、物価は天文学的数字に跳ね上り、

餓死者は続出し、説教師が毎日朝晩ふりまく熱狂的な言葉で生きている有様であった。かかる危険な状態、窮状がパリの指導部や姉のモンパンシエ公夫人から訴えられても、マイエンヌ公は地方での成功という「良き知らせ」を送るだけで、パリ救出に向おうとはしなかった。八月七日には、パリの指導部は絶望し、マイエンヌ公にこう書き送った。「閣下の数々の幸運な成功の知らせは、私達を押しつぶしている禍がずっと以前に私達に喜ぶことを忘れさせなかったならば、私達を非常に喜ばせもしたでしょう。……しかし、事態はもうここまで来ているのです。私達はこれまでずっと無駄に希望を抱き続けましたので、もはや希望をもつことはできません。あまりにも長いこと待ち続けましたので、もはや悲惨な滅亡と崩壊しか望むことはできません。」パルマ公はフェリーペの命令にも拘わらず、両面作戦によってネーデルラント再征服に失敗することを恐れて、フランス介入に乗り気でなく、ようやく八月に入ってから介入した。八月一六日に一万五〇〇〇の軍隊を率いてランに到着し、ランの町をあげての熱烈な歓迎を受け、翌一七日にソワソン、そしてモーに向い、マイエンヌ公と後発部隊を待った。八月二六日にパルマ公とマイエンヌ公の二万五〇〇〇の連合軍はモーからパリに向けて進軍し、アンリ四世は連合軍に対峙するために一部包囲を解き、パリはようやく息をつくことができた。

マイエンヌ公の軍隊が六月にラン地方から去ると、ランのまわりの町では金がなく、農村の荒廃を憂慮して、休戦協定を結ぶ気運が高まった。ランの町もマイエンヌ公に多額の金をまきあげられて金がなく、農村の荒廃が物価高や農村からの徴税不可能という事態にはねかえっていることを憂慮し、八月二七日に休戦協定を結ぶことに同意した。しかし、軍隊をかかえている限り、休戦協定を結ばせる二つの理由は相入れず、軍隊に金を支払えない以上、農村の略奪を認めるしかなく、九月の収穫期に入ると、国王側とパルマ公・マイエンヌ公連合軍が対峙して戦雲が立ち込めたことと相俟って、ランのまわりでも両派の町が再び小競合、略奪合戦を始めた。九月一七日にはランの町が攻撃さ

れた。その日は偶々、区長官テュレにヤクザと罵られ、殴られた守備隊兵が総督ダルシの支持のもとに、テュレを襲って重傷を負わせ（九月二四日死亡）、その守備隊兵を処刑しようとする市当局と守ろうとする守備隊が対立し、警備の手薄な日であった。コンピエーニュの総督ユミエールはクーシの町と組んで、夜陰にまぎれて城門を爆破し、ランの町を占領することを企てた。しかし、王門の鉄柵にとりつけた城門爆破器が二つとも壊れていて点火せず、怒った兵隊たちはランの町に発砲して帰って行った。その音に敵が侵入したものと驚き、ノートル・ダム大聖堂とサン・マルタン修道院の大鐘が鳴らされ、総督ダルシ率いる守備隊兵は城門、城壁に走り、区長官率いる住民は家宅捜索を行い、ボダンを含め三四、五名を投獄した。この三四、五名の投獄者は九月二三日に、逃亡者の妻子やル・トロザムに反対する聖職者など一二、三名がランから追放され、代官刑事補佐官、裁判官、弁護士、検事といった国王官職保有者と商人、教会参事会員の金のある一八名は五〇エキュから五〇〇エキュまでの保証金を払って釈放された。そして、ボダンは三名の未亡人とともに無条件で釈放された。[42] ボダンはまだ秘密委員会からは特別扱いを受けていた。

ランの町は一一月一日にもクーシの町の軍隊に攻撃を受け、防衛・臨戦体制の確立のために金集めに専念した。総督ダルシ率いる三〇〇名の守備隊兵は略奪にも出れず、俸給の支払いがずっとないことに不満を述べていた。しかし、金は集まらなかった。俗人に一四〇〇エキュ、聖職者に七〇〇エキュの自発的献金を課したが、もはや誰も払おうとはしなかったし、払えなかった。農村から強制的にタイユ税を徴収しようと係官を派遣したが、農民は大部分が都市に逃げておらず、豚や牛を数頭手に入れただけであった。もはや長びく略奪合戦、ボダンのいう「戦争というよりは、我々破産しつつある者を破滅すべき……ひどい市民いじめ」[43] によって、農村は荒廃し、交易は滞り、物価は上り、地代は入らず、ランの町とまわりの農村は破産状態にあった。また、ルグラの指導下に、逃亡した者と追放された者の財産没収を組織化したが、もはや親戚や友人が隠してしまっていて、ほとんど没収できるものはなかった。結

局、成功したのは、住民に週一回の城壁強化の夫役を課したことだけであった。そこへ、一一月三日にパルマ公の使節が訪れ、五〇〇名の兵隊とイタリア人の銀行家ザメ引受けの四〇〇〇エキュの為替手形の提供を申し入れてきた。巧みに国王軍との戦争を避けながら、パリ解放という目的を達成したパルマ公は、帰国するにあたって、ネーデルラントからパリまでの道を開けておくために、その途次の町に自分の軍隊を振りわけようとしていた。ランの町はただちにパルマ公の提案に同意したが、後に四〇〇〇エキュの為替手形は引き出せないことが解り、金にはならなかった。一二月一四日には、パルマ公を国境まで見送ったマイエンヌ公がランに到着し、一八〇名のフランス兵と三〇〇名のパルマ公が残していった外国兵を城内に入れ、兵隊にタイユ税での俸給の支払いと毎月一二ミュイの小麦、毎日二樽のブドウ酒の提供を求められた。ランの町は金がなく、外国兵を城内に入れることを渋ったが、兵隊には支払いはしない、ラン地方のすべての徴税権をランの町がもち、ブドウ酒一樽二エキュの新しい関税をかけることの同意をとりつけ、マイエンヌ公の要求に応じた。外国兵を城内に入れたことで、しかも猥雑に騒ぎ、略奪品の分配をめぐって喧嘩を起すに及んで、非常な不満が起ったが、九一年二月二日にランのまわりの外国兵が集まってクーシの町をおとし、ランの防衛・臨戦体制の確立に有効なことが解り、不満は鎮まった。

九一年二月以来、ランの町では平穏な日々が続いた。リシャールによれば、ランの住民は戦争に疲れて、「誰もが時間を止め」、「眠り」の時を過ごした。秘密委員会はランの町が危険なこと、そのために先に課した一四〇〇エキュの自発的献金の支払いが急なことを訴えたが、誰も聞こうとはしなかった。ランのまわりではリーグ側が圧倒的に優勢で、ランの町が襲われる危険はなく、国王軍は二月以来、ランの町から遠く離れ、関心のない、パリの穀物倉たるシャルトル（四月一九日陥落）、ルヴィエール（六月六日陥落）の包囲に従事していた。そして、五月初めに、夏に国王戴冠の町ランスで三部会を開催する旨のマイエンヌ公の手紙が届くと、人々は「この戦争ももうすぐ終りだ」と

語り合った。ボダンは人々が今年中に平和が訪れると語り合うのを聞き、自分の予言がはずれることを期待しながらも、戦争がまだ二年間終らないことを知っていた。そして、「外国人の餌食」となるのではないか、君主と人民のつなぎ目たる貴族の多くが死に絶え、君主政体の再建が不可能になるのではないかと、ますます戦争に対する危機感を募らせていた。[44] 五月一六日にランの町は代議員にルグラと死亡したテュレに代って区長官に選ばれた国王弁護士ドネを選び、二人は旅費五〇エキュをもらい、総督の代理委任状と秘密の訓令をもって、六月五日にランスに向った。しかし、ランスに着くとすぐに、三部会が中止になったことを知らされた。マイエンヌ公はパリの代議員の多数を一六人委員会が占め、その嘆願書は一六人委員会のメンバーが作成したことを知った。三部会を六年毎開催し、三部会の承認なしには、国王は宣戦布告も講和も、課税もなしえず、また国王はカトリック教徒で、異端を弾圧するという王国基本法を守らねばならない。国王がこれに違反したときは、人民は服従の誓約から解放される、というものであった。スペインと通ずる一六人委員会を恐れ――ランスではネーデルラントに近すぎ、パルマ公介入の恐れもあった――、また、たとえ王に選ばれるにしてもかかる過激な条件のもとで王に選出されることを恐れ、マイエンヌ公は三部会を中止した。

八月初めに、イギリスの軍隊で増強した国王軍がピカルディに向っているという知らせが届くと、ランの町では再び緊張が高まった。八月一八日には、ランから四、五〇キロしか離れていないノワイヨンの町が陥ちたという知らせが入り、緊張はいやがうえにも高まった。広場のマリア像の髪の花飾りが壊れているのが見つかっただけで、ユグノーが城内に侵入したと大騒ぎになっていた。ランの町はまわりにいたリーグの軍隊はすべて城内に招き入れ、食料とブドウ酒を提供し、俸給の支払いを約束し、次々と自発的献金を課した。金は相変わらず集まらなかったが、逃亡した長官ドフェールの財産八〇四エキュを没収でき、どうにか急場をしのいだ。ようやく一〇月末になって、国王軍が

遠く離れ、パリ経済の拠点ルーアンを包囲していることが解り、緊張は解けた。

一一月一二日以来、リーグの諸公が法皇の甥モンテマルチアーノ公率いる法皇軍を迎えるために、続々とランの町に集まってきた。法皇グレゴリウス一四世は、一六人委員会から、法皇に対する期待が大きかっただけにそれだけ失望も大きく、「悪しきポリチークの法皇」と批判された前任者（シクストゥス五世）とは異なって、即位直後からリーグに肩入れした。月々一万五〇〇〇エキュを援助し、法皇特使ランドリアーノをフランスに派遣し、甥のモンテマルチアーノ公率いる法皇軍を派遣することをリーグに約束し、金の援助を除いて、誠実に実行した。法皇特使ランドリアーノは五月にフランスに入り、王党派のカトリック貴族と聖職者に今すぐ異端のナヴァール王のもとから離れ、正統なカトリックの王の選任に協力せよ、という法皇の手紙を公表した。そして、八月にモンテマルチアーノ公率いる法皇軍がフランスに向けて出発した。リーグの諸公は非常な期待のもとに、この法皇軍を迎えにランに出向いて来ていた。マイエンヌ公、マイエンヌ公夫人、ギーズ公夫人、若きギーズ公、マイエンヌ公の顧問のヴィルロワ、ジァナン以下多くの貴族が集まっていた。しかし、人気の的はマイエンヌ公ではなく、かの王者たる偉大な殉教者の息子、若きギーズ公であり、ランの住民の熱狂的な歓迎を受けた。ランの町は若きギーズ公がトゥールの城から脱出したという知らせが届いた八月一八日でさえ、テ・デウムを唱和して荘厳な聖行進を行い、祝火をあげていた。そこへ、一一月一八日にマイエンヌ公はパリのロラン兄弟の訪問を受け、一六人委員会がパリ高等法院首席長官ブリソン、それにパリ高等法院評定官ラルシェとパリ裁判所評定官タルディフの三人を処刑したことを知らされた。マイエンヌ公は一六人委員会の度重なる不敵な行為に激怒したが、決断力のなさと一六人委員会、パリの町に対する恐怖から、パリに行くことを躊躇した。ヴィルロワとジァナンの、今すぐ行動しなければ、一六人委員会がスペインと組んで権力を握り、マイエンヌ公の権威は打砕かれるだろうという助言で、パリに向おうとしたが、一六人委員会の脅し

の手紙が届いて躊躇した。二六日にヌムール公夫人の使者が訪れ、一六人委員会が更に高等法院の粛清を企てており、急いでパリに来て欲しいと訴えると、マイエンヌ公は決断し、ランを立ってパリに向った。

パリでは、包囲中一時おさまっていた一六人委員会とマイエンヌ公の対立が九〇年八月の解放以来再び激化していた。一六人委員会は、パリ救出に来ず、パルマ公が去るやコルベイユ、ランとパリを取巻く町を取返されたマイエンヌ公に怒り、シャルトルが占領されたときには、説教師は怒りのあまり、マイエンヌ公を「女郎と寝るしか能のない太った豚」とまで罵った。そして、マイエンヌ公に総評議会を再興し、今いるポリチークの顧問に代えて、総評議会の助言で統治を行うこと、パリ高等法院を粛清して彼ら一六人委員会のメンバーに代え、彼らからなる「粛清法院」を設立すること、それにスペイン、法皇との同盟の強化を繰り返し訴えた。それに対して、マイエンヌ公は一六人委員会の要求を一切無視し、パリの市政を一六人委員会からとりあげるために介入し、市長に大評定院の長官で訴願審査官のブーシェと三名の助役もマイエンヌ公派で固めた――一六人委員会はマイエンヌ公がパリから去ると、二名の助役の選出に疑義があるとしてやり直させ、とり返したが――。一六人委員会の指導者で前パリ市長ラ・シャペル＝マルト、助役ロラン、プレヴォ、ドルレアンは一六人委員会を離れ、理論家のドルレアンは一六人委員会を暴力によって他人の財産と官職をねらう盗人と野心家の集まりと決めつけ、ポリチークと並んで一六人委員会をリーグの破壊分子と激しく攻撃した（『イギリスのカトリック教徒がカトリック教徒のフランス人に与える第二の警告』九〇年）。一六人委員会はこの時期もっぱら野心的な弁護士、検事など下級官職保有者（四六名中二四名）と法皇至上主義の司祭（七名）の集まりとなり、初期には一六名いた上級官職保有者と大商人は、ブリソンに私的敵意をもつクロメなどわずか五名に減っていた。

九一年に入ると、一六人委員会はマイエンヌ公に対抗し、独自に法皇、スペインと直接交渉を始めた。法皇グレゴ

リウス一四世からは励ましの言葉と資金援助の約束までであったが、スペイン特使マテオ神父との交渉では、スペインの軍事的・経済的援助に対し、一六人委員会はフェリーペの王位選出、あるいは王女イサベルと若きギーズ公の王位選出に協力することが決まり、九月二〇日にその旨誓約した手紙をフェリーペに送った。マイエンヌ公は国王側の手に渡ったその手紙の一通をアンリ四世から送られ、一六人委員会がリーグの代表として外交交渉を行い、彼の王位選出阻止を謀っていることに激怒した。そこへ、今度は一六人委員会がパリ高等法院首席長官ブリソン以下三名を処刑し、更なるテロを企てているという知らせが届いたわけである。一六人委員会は高等法院長官ブランクメニルに続いて、パリ裁判所評定官タルディフ、高等法院評定官ラ・ヴェルニュ、それに一六人委員会を脱退した治安判事ブリガールと「ポリチーク」の逮捕を続けたが、高等法院がすべて証拠不十分として釈放するのに怒り、首席長官ブリソン以下二七名の高等法院の裁判官を処刑し、それを契機に民衆蜂起を起してポリチークの大量処刑を企てた。一一月一五日にブリソン以下三名の裁判官を処刑し、民衆に蜂起を訴えた。しかし、民衆は動かなかった。一六人委員会は、大義に熱狂した者がいつもそうであるように、時勢を無視し、ローマ・カトリック教という大義のためには誰もがいつでも、彼らのように、生命を投げ出すものと誤った。国王軍包囲中なら成功もしただろうが、あの何万人もが餓死し、犬、猫、ねずみ、更にはロウソク、墓地の人骨をすりつぶして作ったパン（「モンパンシエ公夫人のパン」）、そしてレトワールによれば人肉までも食っていたという飢餓地獄をどうにか抜け出した者たちは、とにかく、戦争と無秩序に疲れ、平和と秩序を望んでいた。民衆蜂起が起きないことが解ると、一六人委員会はP（絞首刑）、D（刺殺）、C（追放）に分類したポリチークのリストを作成し、テロに走ろうとした。その直前に、マイエンヌ公が一〇〇〇以上の軍隊を率いて、パリに着いた。

一一月二八日にパリに着くと、マイエンヌ公は一六人委員会にバスチーユを明け渡すよう要求し、一六人委員会が

フェリーペに宛てた手紙とブリソンの処刑について調査を始めた。一六人委員会はすべてはローマ・カトリック教という大義のためにやったことであり、スペイン大使のイバラとともにマイエンヌ公を説得できるとたかをくくり、更なる高等法院の粛清、ポリチークを処刑すべき火刑裁判所「粛清法院」の設立を訴えた。しかし、マイエンヌ公はブリソンの件はともかく、スペインと組んで彼の王位選出を阻止しようと策謀する一六人委員会を許すつもりはなく、一二月一日に一六人委員会がバスチーユを明け渡し、民衆蜂起が起る可能性がないことが解ると、潰しにかかった。まず、ブリソンの後任にル・メートルをつけ、パリ高等法院に一六人委員会の処刑を要求したが、一六人委員会に怯える高等法院はマイエンヌ公の要求に後込みした。合法的処刑ができないと解ると、マイエンヌ公は一二月四日に軍隊を使って一六人委員会の逮捕を始め、クルセ、アモノ、ルシャール、アンルーの四名だけを処刑し、他は釈放して、一六人委員会を禁止した。ここに一六人委員会は地下にもぐり、スペインと組んだ地下活動を続けるが、政治勢力としては終った。マイエンヌ公はこの寛大な一六人委員会の処罰によって、マイエンヌ公派がポリチークと地下にもぐった一六人委員会のバランスをとって、パリ支配権を握るだろうと考えたのだろうが、マイエンヌ公派はその大部分が状況の強制とアンリ四世の宗教だけが障害となっているポリチークの隠れ蓑であり、ポリチークが握ることになるパリ支配の空白を生み出しただけであった。一六人委員会に代る自分の強力な党派を作ろうとはせず、マイエンヌ公は一二月一一日にランに戻って行った。

一二月一五日にマイエンヌ公はランに戻って来たが、期待に反して、法皇軍はもともと四二〇〇の騎兵と六〇〇〇の歩兵と少なく、この少ない兵も金と物資が欠乏し、赤痢にやられて半減しており、国王軍に包囲されたルーアン救出に向えるようなものではなかった。ルーアン包囲中の国王軍は新たにエリザベスの寵臣エセックス率いる四〇〇〇のイギリス軍、カジミールの甥のアンハルト伯クリスチアン率いる六八〇〇のドイツ騎兵と一万のドイツ歩兵も加わ

って、ふくれあがっていた。九二年一月にパルマ公がフェリーペの命により介入し、マイエンヌ公はそれに合流し、五〇〇〇の騎兵と一万八〇〇〇の歩兵でルーアン解放に向った。アンリ四世は六〇〇〇の騎兵だけを率いて、ヨーロッパ最高の武将の誉れ高いパルマ公に戦いをしかけた。この騎士物語を愛読し、意中の女性（かつては「気高いコリサンド」、今は「麗しのガブリエル」）に勝利を捧げる王は常に先頭に立ち、白い羽毛飾りをなびかせながら、騎兵を重視した指揮をとり、彼の勇気と騎兵でこれまでマイエンヌ公の大軍を破ってきたのであり、勝算があったのだろう。二月三日にオマルの近くで両軍がぶつかったが、アンリ四世の騎兵はスペイン歩兵に大破され、自身傷を負った。パルマ公は慎重にゆっくりと軍を進め、それに呼応してルーアンの総督ヴィヤール＝ブランカ率いる防衛軍も打って出、四月二〇日にルーアンは解放された。ところが、四月二五日にルーアンからパリへの道を開けるためにコドベック解放に向ったパルマ公は右手に弾丸を受け、この機をとらえた国王軍の反撃によってマイエンヌ公は三〇〇〇の兵を失って追いつめられ、パルマ公は床から起きて指揮をとり、夜中に筏でセーヌ川を越えさせ、ネーデルラントに帰った。このときの傷がもとでパルマ公は、三度目のフランス介入の準備をしていたアラスの町で、フランス介入の命令に忠実でないことを怒ったフェリーペの本国召還命令が届いた一二月に死ぬことになる。アンリ四世は戦争に嫌気がさし、外国兵は帰らせ、白い羽毛飾りの帽子はビロン元帥に与えて指揮をまかせた。軍事で王国を平定できない以上、それに内部対立も抱えており、政治に戻るべき時であった。いとこのヴァンドーム枢機卿（今や、ブルボン枢機卿）率いる「第三の党派」はますます強くアンリ四世に改宗を求め、法皇、リーグとの妥協工作にとりかかり、いとこのソワソン伯は第三の党派とアンリ四世に捨てられた「気高いコリサンド」の支援のもとに、彼に夢中なアンリ四世の妹カトリーヌとの結婚を企んでおり、またスペイン王に追いつめられたマイエンヌ公はアンリ四世との妥協交渉を求めていた。このルーアン包囲戦を最後に、大きな戦争は終った。

大規模な戦争は終ったが、戦争が終ったわけではなく、むしろ戦争とその禍が九二年中に中央部、北部、東部から西部、南部とフランス中に拡散し、王国分裂と社会的無秩序の様相を呈していた。ブルターニュでは、メーヌ、アンジュ、テュレーヌの地方総督コンチ公とブルターニュの地方総督ドンブ公が八〇〇の騎兵と六七〇〇の歩兵を率いて侵攻したが、スペイン軍によって増強したメルケール公に大破され、ラヴァル、マイエンヌ、シャトー＝ゴンチエの町もとられた。反領主、反租税で蜂起した農民軍も、モンパンシエ公によって壊滅されたノルマンディの農民軍同様、もっぱらリーグにつき――メルケール公配下の盗賊部隊に対しては攻撃していたが――、国王軍はイギリスのノリス卿とラ・トロンブレが守るラニオンなど一部の町をもつだけで、ブルターニュは事実上国王側もマイエンヌ公も介入できない独立の公国となり、サン＝マロという小都市はメルケール公も介入できない独立の都市となった。ポワトゥからペリゴールまではもっぱら国王側についていたが――ポワチエの町などを除いて――、大軍の通り道となり、疫病にやられたこの地方の農村は荒廃しており、翌九三年から最大の農民一揆、クロカンの一揆に見舞われることになる。ラングドックでは、アンリ三世の寵臣の息子のジョワイユーズ公がスペインの援軍も加え、国王側の高等法院が移されていたカルカソンヌを占領し、リーグの拠点トゥルーズからユグノーの拠点モントーバンに向うヴィルミュールの町を包囲し、アンリ三世の寵臣エペルノン公の一部隊を破ったが、ダンヴィルの軍隊に大破され、死んだ。その後を弟のカプチン僧がジョワイユーズ公を継ぎ、ラングドックのリーグ軍を指揮し、一二月にダンヴィルと休戦協定を結ぶまで戦った。また、コマンジュ地方のカトリックの農民と小都市住民は「カンパネール」と呼ばれる独立の自治組織をつくり、フォワの町のユグノーと組んで、トゥルーズの町が起した軍隊と戦っていた。プロバンスでは、もっと混乱していた。地方総督のラ・ヴァレットの死に代って、ドフィネのユグノー軍指揮官レディギエールがプロヴァンスに進撃し、サヴォワ公をヴァールの向こうにまで追い帰したが、ヌムール公、義兄のマイエンヌ公と

喧嘩をしてパリ市総督をやめ、リヨネに公国を築いていたヌムール公がドフィネに進撃し、ラ・ヴァレットの弟のエペルノン公が兄の地位を継ぐためにアングレームからプロヴァンスに進撃してきたので、レディギエールはドフィネに引き返さねばならなかった。エペルノン公はレディギエールとサヴォワ公の双方に対峙した。そして、マルセイユ、エクス、アルルといったリーグの都市は内部の党派が各々サヴォワ公、マイエンヌ公の義兄弟カルセ伯、ソー女伯、その他の貴族と組んで独裁と反乱を繰り返し、カゾー独裁下のマルセイユは遂にはフランスから独立の都市となった。

こうした戦乱の影響で、トゥルーズ、エクス、グルノーブルの穀物価格は九二、三年にピークを迎えており、またこの地方の毛織物業も停止し、マルセイユの貿易も停滞しており、南部地方はパリとその近郊の町に二年遅れで、経済的危機の時代を迎えたであろう。かつての宗教戦争では一地方の戦争による禍は他の地方での禍を意味しなかったが、今や、食料欠乏とひどいインフレ、農村の荒廃と人口減少、手工業の停止と遠隔地貿易の停滞――ラ・ロシェルを例外として――がフランス全土に共通してみられた。そして、各地方、各都市はますます中央政府から離れる遠心的傾向を強めていた。ユグノーの冷静な観察者によれば、「今日各地方、各地の支配者は、どんなに賢明ですぐれた者でも、その地方、都市、城塞の統治にあたって自分以上の存在を決して認めませんし（これ程例外のない規則はありません）」、「まもなく自らを主権者としないような村もフランス中のどこにも見あたらないということになるでしょう」（『フランスの現状に関する四論稿』九三年）。こうした遠心的傾向はとくにリーグに顕著で、マイエンヌ公の政府はパリと東部にしか影響力をもたないものになった。

パリでは、九二年に入ると、マイエンヌ公に潰され、戦争と物資の欠乏に疲れて平和と秩序を求める住民に見捨てられた一六人委員会に代って、ポリチークが支配権を握っていた。高等法院は三月以来一六人委員会に対する報復を

始め、一六人委員会のメンバーを逮捕し、ミシュレ以下三名を処刑した。そして、パリ市長ドブレを中心に、ポリチークはアンリ四世に代表を送って改宗を迫り、パリを国王に明け渡すことを画策し、一〇月から公然と行動に移した。マイエンヌ公はこの知らせにあわててパリにやって来たが、マイエンヌ公派の実態がラ・シャペル＝マルト、ロランなどごく数人を除いて、アンリ四世の宗教だけが障害となっているポリチークの隠れ蓑にすぎず、パリの支配権を握っているのが彼らであることを知った。マイエンヌ公はアンリ四世との交渉を禁じ、市政に介入して、市長にマイエンヌ公派の会計検査官リュイエをつけ、助役をポリチークと一六人委員会で折半した。しかし、それでもパリの支配権は上級官職保有者と大商人を中心とするポリチークが握ったままであり、ますます影響力を失うマイエンヌ公はもはや三部会の開催をこれ以上引き延ばせないことを理解し、一二月、それが無理だと解ると、九三年一月にパリに召集することを決定した。

ランの町では、九二年も相変わらず九一年二月以来の平穏な日々が続いていた。ルーアン解放に加わるためランにいた軍隊はすべて出払い、城内には総督ダルシ率いる守備隊と総督の姪の婚約者で、後任の総督に任命されるピェールポンの地方貴族リュが連れてきた数名の兵しかいなかったが、ランのまわりでは何事も起らなかった。農民と兵隊くずれが野盗と化し、商人が時々襲われていただけであった。熱狂的な説教師ル・トロザムは彼のやり方に反対する司教やサン・ヴァンサン修道院長側の聖職者との対立もあって、イエズス会の修道院にもどるため五月一七日にランを去って行った。また、ランの代官になったルグラがル・トロザム、ラビッシュ派の司祭や民衆と組んで、最高指導者の地位を要求していたが、総督、司教、サン・ヴァンサン修道院長、区長官ドラメール、裁判官ヴェロンなどが十分有効に反対しており、このこともランの平和に幸いしていた。五月二四日に国王軍がランの方に向っているという知らせが入ったときには、一時緊張が起きた。市会はただちにリュに三〇〇エキュを与えて防衛に協力を要請し、タ

イユ税を支払わない者は町から追放と決定し、町の四辻にその旨張り出して、金を集めた。また、魔術師だと吹聴していた若い男と年老いた樵が、前者は敵に魔術で城門を開けることを約束した容疑で、後者は敵の諜報員の容疑で捕えられ、投獄された。しかし、その知らせが誤まりだと解ると（実際には、国王軍はランの町が関心もないほど遠くはない、ランスに近いエペルネの町の包囲に向っていたが）、緊張はとけ、平穏な日々が続いた。

そこへ、一二月初めに、カトリックの王を選出すべき三部会召集の知らせが届いた。一二月一七日に、総督、市政担当者、二四人委員会のメンバー、それに名士と選ばれた八〇名の住民が加わって市民総会が開かれ、市会が作成した草案にもとづいて嘆願書の作成が行なわれた。それは三部からなり、第一部はカトリック教の取扱い、第二部は王国の取扱い、第三部は人民の取扱いについてである。第一部では、和解王令を廃止し、「いわゆる新宗教」を全面禁止し、トリエント公会議の決議を導入し、中立的な貴族と都市もリーグ側につけ、共同して異端にあたること、それに、国王官職には熱烈なカトリック教徒で品行方正な者を任命することを求めている。第二部では、人民の権威のもとにカトリック教徒で有徳な王を選任し、ナヴァール王を決して王とは認めないことを決議すること、そして新王は決してカトリックから離れず、異端を保護しないことを誓約し、それに違反したときは人民は服従の誓約から解放されることを決議するよう求めている。更に、新王は教会の不可侵、都市と団体の特権を守ること、三部会の権威のもとに法皇、スペイン王、ロレーヌ公、サヴォワ公、その他すべてのカトリック諸公と同盟を結び、異端の国々や都市と対決すること、統治においては何はさておきカトリック教に触れないかどうかを考慮すること、法律は古来の慣習どおり、「国王の絶対的で、完全な権威」によってではなく、高等法院の認可と公示によること、そして現在の混乱を収拾し、全般的改革を行うための三部会の召集を誓約することを求めている。第三部では、全般的改革は新たに召集される三部会を待つことにし、カトリックの町の近くにある城塞を壊すこと、軍規を確立し、農民に対する略奪を

禁ずること、都市は軍隊への金の支払いを負わないこと、それに新王はこれまでカトリックの町が王権に代ってやってきたことを追及しないことを求めている。この同盟王令の思想に忠実な、それにランの特殊事情を付け加えた嘆願書の草案が、その審議にリシャールは加わっており、ボダンも加わっていたと思われるが、反対する者はなく、そのまま可決された。市会は二二日に代議員にもたせる私的訓令を作成し、三〇日に前回の九一年五月の選出で首位で選ばれていたルグラ一人を派遣することにし、ルグラは九三年一月一三日に旅費一〇〇エキュをもらってパリに向った。人々は今度こそ戦争が終わり、平和が来ると語り合ったし、ボダンも今度はそう信じた。ボダンの予言では、九三年は平和の前ぶれとなる大変革が起きる年であり、それは神に選ばれた王が決まることだと思えたであろう。ボダンは具体的に王としてはマイエンヌ公、あるいは改宗したナヴァール王を考えていたが、それよりも王権が再建され、平和が訪れることの方に関心があり、その希望が見え始めたことを喜んでいた。九三年一月一二日にパリの友人に宛てて、パリからおそらく三部会召集の知らせを持ってきた共通の友人を歓待し、楽しかったことを得々と語り、今年中に「神が軍隊とその勝利、王杖と王冠を意のままに扱い」、「本当に幸わせな神の平和」をもたらすことになる「大変革」が確実に起きることを書き送った。[45]

カトリックの王を選出すべき三部会が、九三年一月にパリに召集された。アンリ四世がこの三部会を非合法、反逆罪にあたると宣言し、地方での新たな攻勢を命じたために、パリへの旅行は非常に危険で、ノルマンディの代議員はヴィヤール＝ブランカの軍隊に守られて行くために一月一二日にルーアンに集まったが、二月八日まで出発できなかったし、他の代議員も軍隊に守られたり、変装してパリにやって来た。一二八名の代議員（第一身分四九名、第二身分二四名、第三身分五五名）しか集まらず、もちろんパリの属するイル・ド・フランスからは二〇名と最も多くの代議員が集まったが、多くの地方監督官区から一人の代議員も来ていなかったし、ラングドックからはトゥルーズの代議

員一人しか加わっていなかった。ランの嘆願書とその他の現存する嘆願書(ランス、ルーアン、トロワ、オクセール)から判断しても、代議員は大部分がリーグに忠実であったと思われる。しかし、パリの代議員は前市長ドブレ、高等法院首席長官ル・メートル、デュ・ヴェールなどのポリチーク、租税院長官ヌイイ、再びポリチークに反発してもどったドルレアン、司祭のブーシェ、ローズなどの一六人委員会、それにパリ市長リュイエ、貨幣院評定官ロランぐらいのマイエンヌ公派に分裂していた。

三部会は一月二六日にルーヴル宮で開会された。マイエンヌ公が開会演説をやり、これまでのリーグの功績を称え、代議員に今後為すべきことを助言するよう要請し、自身カトリック教と国家のために命を投げ出す覚悟である旨述べた。そして、まだ着いていない法皇特使とスペイン王特使に代って、ペルヴェ枢機卿があいさつの言葉を述べ、開会式は終った。

スペイン特使フェリア公は法律家のメンドーサを従え、莫大な金をもって、ネーデルラントの臨時総督マンスフェルト伯率いるスペイン軍とともに二月九日にランに着き、そこでマンスフェルトの軍隊と別れ、パリに向った。しかし、パリではアンリ四世側のカトリック貴族の会談提案をめぐって混乱が生じており、すぐに活動に入ることはできなかった。マイエンヌ公はフェリア、法皇特使セガ枢機卿、ペルヴェ、それに一六人委員会の反対にも拘わらず、スペインの勢力に対する対抗措置としてその提案を受けることを決意しており、二月二五日に三部会の同意をとりつけた。一六人委員会は反対運動を起こしたが、しかしパリの住民は平和を望んでおり、リーグ側の代表が会談に向う際には多くの群衆が見送り、口々に「平和を!」と叫んだ。四月二九日に、パリの近くのスレーヌの村で会談が始まった。リーグ側はリヨンの大司教エピナクが代表で、それに三部会の代表ル・メートルとディジョン高等法院評定官ベルナール、マイエンヌ公が送り込んだヴィルロワ、ジャナン、パリ市総督ブラン、ヴィヤール=ブランカであり、国

王側はブールジュの大司教ボーヌが代表で、それにベリエヴル、ド・トッ、五名の国王顧問であった。パリのまわり四里以内とスレーヌのまわり四里以内での休戦協定はすぐに結ばれたが、カトリックの王国基本法と世襲権の王国基本法をめぐる対立は解けなかった。そこへ、五月一七日にブールジュの大司教は国王が改宗の決意である旨述べた。リヨンの大司教はかかる改宗をカトリック教徒は信用しないだろうと答えたが、とにかくマイエンヌ公が恐れた、三部会の存在意義を失わせる最初の爆弾が投じられた。

スペイン特使フェリアはようやく四月二日に三部会に出ることができた。フェリーペの手紙を三部会に提出し、そして高飛車にも、フランスがフランソワ二世以来いかにスペインの恩恵に浴してきたか、この三部会もスペインのおかげで開催できたことを得々と述べたてた。これにはペルヴェ枢機卿さえ頭にき、大昔のクローヴィスの時代以来スペインがフランスに負っている恩恵の数々を並べたて、溜飲をさげた。スペイン特使は買収の金、三部会の代議員だけで二万四〇〇〇エキュもの金をばらまき、マイエンヌ公に早く国王選出に入るよう圧力をかけた。三部会の存在意味をなくさせる、アンリ四世の改宗の最初の爆弾が投げられたことで、五月二八日にマイエンヌ公はカトリックの国王選出の議題に入ることに同意した。五月二九日の総会で、スペインの第二特使タシスはスペイン王女イサベルを女王に選出するよう求め、その後で法律家のメンドーサが、サリカ法が喧嘩王ルイ（一〇世）の時代に始まった新しい慣習にすぎず、王国基本法たりえないことを長々とラテン語で論じた。三部会はスペイン王女の無条件の選出には反対し、彼女が結婚する、王位に選出さるべきフランスの公爵の指定を求めた。それに対して、タシスは六月一三日にオーストリア・ハプスブルク家のエルネスト大公を指定した。この指定に、自分の息子の指定で妥協する用意のあったマイエンヌ公は激怒し、三部会は激しい不満を表わした。フランスの伝統的な敵ハプスブルク家に対する憎悪もよみがえり、パリの住民は道を通るスペイン特使、それに組みする法皇特使と一六人委員会のメンバーに公然と罵声を

あびせた。法皇特使が仲裁に入ったが、スペイン側の譲歩は、六月二一日にフェリアが提示した、スペイン王女を女王に選出し、その後ギーズ＝ロレーヌ家の公爵と結婚するというまでであった。パリ高等法院はスペインの最初の提案以来、裁判官デュ・ヴェール、首席長官ル・メートル、検事総長モレを中心に、スペインとその同盟者たる一六人委員会、それにマイエンヌ公に敵対する策を練っていた。六月二八日に遂に爆弾を投じ、サリカ法に違反して、外国の王公や王女に王冠を渡すような協定を結んではならないし、結んでも無効であると宣言した。この宣言によって決定的に流れが変った。スペイン側は法皇特使の説得によってようやく七月に入ってから、スペイン王女と若きギーズ公の結婚、即位を提案したが、三部会はもはやその提案をとりあげようとはしなかった。

リーグの三部会はアンリ四世の改宗によって存在理由を失った。スレーヌでは、五月一七日のアンリ四世改宗の決意表明をめぐって、罪障消滅を申し渡し、教会に受け入れうるのは法皇だけだとする、法皇至上主義を主張するリーグ側とガリカニズムを主張する国王側が激論を闘わしていた。それにはお構いなく、アンリ四世は六月に、一六人委員会のギュアンセートルも含む四名のパリの司祭にカトリック教を教えにサン・ドニに来るよう手紙を送り、四名の司祭は法皇特使の破門の脅しにも拘わらず、サン・ドニに出かけた。戦争と無秩序に疲れ、平和と秩序を求める声は激越な説教師までも捉えていた。七月二五日にアンリ四世改宗の儀式がサン・ドニの大聖堂でとり行なわれ、改宗した王はミサに参列した。そして、新攻勢により国王軍優勢のうちに、七月三一日にフランス全土での三カ月間にわたる休戦協定が調印された。

一六人委員会は最後の反撃に出た。権力を失った彼らは説教とパンフレットによって。ブーシェはかのベアルン人の改宗の欺瞞、道化ぶりを激しく諷刺し、かの羊の衣をまとった狼が王冠を手に入れたが最後、すべてのカトリック教徒が虐殺されるだろうと説教し、他のリーグの説教師もかかる説教を繰り返した。しかし、民衆はもはやこうした

激越な説教にあいており、平和と国王の改宗を称える数多くの説教によって相殺された。また、一六人委員会は数多くのパンフレットを出した。ドルレアンは『アレート伯の饗宴』を書き、アレート伯の城に集まる一群の貴族、貴婦人、高位聖職者の口を借りて、ベアルン人とそれに従うポリチークの欺瞞、道化ぶりを諷刺した。この時期の最も優れた著作は、おそらくクロメが書いた一六人委員会の鎮魂曲『廷臣（マニュストル）と職人（マナン）の対話』である。この著作は、ポリチークの貴族たる「廷臣」と一六人委員会の都市民たる「職人」が偶々道で出合い、かわした対話である。まず、ナヴァール王の改宗をめぐって、人民主権の選挙王制論対世襲王制論、法皇至上主義対ガリカニズム、宗教至上主義対平和と様々な議論をしながら、「職人」が「廷臣」を、ナヴァール王の改宗が王冠を手に入れるための策略であって、心からするものではないという一点で、追いつめる。「廷臣」も最後にはアンリ四世の改宗が心からするものか疑いが残ることを認め、再び異端に戻った場合には王のもとから去ることを告げる。しかし、議論が一六人委員会をめぐる状況に入ったとたんに、二人の立場は入れ替わる。追いつめられるのは今度は「職人」の方である。リーグの諸公は自らの野心のために宗教を利用しているだけで、互いに反目しており、小貴族は利益の多い側にすぐに鞍替えし、アンリ四世が勝利することは確実なこと、そしてパリでは高等法院や上位聖職者だけでなく、多くの司祭や民衆も国王側につき、一六人委員会は忌み嫌われているスペインしか頼るものがなく、破滅しか残されていないことが暴かれる。「職人」も遂に状況がそうであることを認めるが、しかし神とともにある正義は一六人委員会の側にあるという信念は揺るがず、後年彼らが被ることになるこの世での悲惨な運命も引き受けようとする。「私はナヴァール王に従うあなたがたのような異端、ポリチーク、無神論者と生きるよりは、神学者、一六人委員会、スペイン人とともに死ぬことを望む。」かかる殉教者の精神は「廷臣」には気違いじみたものにしか見えず、妥協の現実に連れもどそうとするが、「職人」はもはや神の永遠の祝福しか語ろうとはしない。しかし、この崇高な著作もすぐにロランによってマイ

エンヌ公版、ピトゥなどによるポリチーク版に作り変えられたし、またピトゥなどによる『サチール・メニペ』、リーグの三部会、何よりもスペイン金貨でできた万能薬「カトリコン」を諷刺し、ポリチークの立場だけが平和、法、正義、そしてフランスの立場であることを訴えた『サチール・メニペ』の流布によってその効果は相殺された。

リーグの三部会はリーグの内部対立とアンリ四世の改宗によって失敗が明らかとなり、八月八日の会議を最後に解散し、ランの代議員など一部の代議員は正真正銘のカトリックの王を選出するために残ったが、大部分の代議員は帰っていった。フランスは今やカトリックの王をもち、ボダンの予言どおり、平和の前ぶれとなる九三年の大変革が起きた。

(1) 以下、一六人委員会については、アスコリの詳細な学位論文に多くを負っている (P. M. Ascoli, "The Sixteen" and the Paris League, 1585-1591, Ph. D., University of California, Berkeley, 1972)。
一六人委員会の社会構成はサルモンに拠った (J. H. M. Salmon, The Paris Sixteen, 1584-94: The Social Analysis of a Revolutionary Movement, Journal of Modern History, vol. 44, 1972, pp. 540-76)。サルモンの階層分類はリシェによって一部批判されているが (D. Richet, Aspects socio-culturels des conflits religieux à Paris dans la seconde moitié du XVIe siècle, Annales E. S. C., tom. 32, 1977, pp. 764-89)、新たな全体構成が解らないので、ここではサルモンに従った。

(2) Baldwin (III-91), p. 164.

(3) Ascoli, op. cit., p. 179 参照。

(4) 一五九〇年前半の手紙 (文献目録二—13)。

(5) Antoine Richart, Mémoires sur la Ligue dans le Laonnois (publiés par la Société Académique de Laon, Laon, 1869).
このリシャールの覚書はリーグ支配の時代が終ってからすぐに、国王官職保有者として表面的にでもリーグを支持したことの弁明もかねて、もっぱら日記と市の文書に依拠して書かれたものである。リシャールは王党派としてリーグに非常な偏見をもっているが——リーグを下層民、借金にあえぐ者、食いつぶし、犯罪者の集まりと決めつけている——、市の文書に多く依拠しているこ

ともあって、事実に忠実であり、むしろリーグの内部事情にそれほど通じていないことに難点があると思われる。

(6) リーグによって無断で出版された一五九〇年一月二〇日の手紙（文献目録二―12）、それにオマル公に仕えていたリーグの医者アルドゥアンによって筆写された五つの手紙（二―10、11、13、14、15）がそれである。リーグによって出版された一五九〇年一月二〇日の手紙はかつてはボダンが書いたかどうか疑われたが、これだけ資料がそろえば、もはや疑いはない。

これらの手紙はいつ、誰に宛てて書かれたのだろうか。日付けも宛名もない二―10の手紙は、八九年三月一九日を「先の日曜日」と述べ、ランの町がリーグについた三月二一日の「火曜日」、「それに続く数日間」について述べているので、一五八九年三月二六日か、その数日前に書かれた。相手はパリ高等法院の「今や光輝ある偉大な顕職についた、やがて三〇年来になる友人にして同僚」であり、間違いなくパリ高等法院首席長官ブリソンである。ブリソンは六〇年末か六一年初めからパリ高等法院の弁護士としてボダンの同僚であり、八九年一月の一六人委員会によるパリ高等法院の粛清によって、第六長官から一挙に首席長官になっていた。一五八九年八月一五日の手紙（二―11）も、ボダンは相手がパリの町を代表する地位にある者のように語り、地方の略奪合戦で危険になったランからパリに逃げることを打診しており、おそらくブリソンに宛てて書かれたものであろう。

出版された一五九〇年一月二〇日の手紙（二―12）はボダンがランのリーグによって逮捕され、家宅捜索をうけたときに押収されたものであろうが、今まで考えられたような、ブリソンに宛てて書かれたものではない。何故なら、この手紙の相手は王党派の者であり、またこの一年近くたって初めてボダンがリーグを支持したことを知って驚いており、ランやパリ高等法院以外の者でなければならず、それにこの手紙の内容は八九年三月と八月の手紙と多く重複しており、それらの手紙の相手とは別人でなければならないからである。また、ラン地方の貴族でヴェルマンドワ地方監督官のラ・ボブに宛てて書かれたのでもあるまい。ラ・ボブは、ショヴィレが主張するような、熱烈な王党派ではなく、中立の立場をとり、状況によってリーグと王党派の間を揺れ動き、ラン地方でリーグ軍が優勢になった八九年四月にランの町に来てリーグにつく署名をしており（Richart, op. cit., p. 99）――国王軍が優勢になる五月には国王側につくが――、ボダンがリーグを支持したことも早くから知っていたはずだ。ボダンはこの手紙の相手に当時書いていた著作、おそらく『パラドックス』と『自然の劇場』を見せ、献呈したい旨述べており、相手は文芸に興味をもつ、著作でパトロン的立場にあった法服貴族であろう。

日付けも宛名もない二―13の手紙は、一五九〇年前半に書かれたであろう。何故なら、この手紙は内戦がまだ（数えで）四年続くと述べ、九〇年に書かれたものであり――ボダンは内戦がバリケードの日（八八年）から（数えで）六年目（九三年）まで続

き、七年目（九四年）に平和が訪れると考え、この数の学に従っている――、そして、出版された一五九〇年一月二〇日の手紙が自分のものではないか、あるいは自分を陥れようと作為を加えたものだと述べ、リーグに対して予防線を張ることを目的としており、出版直後に書かれたと思われるからである。この手紙の相手は、パリ高等法院の弁護士ドージェとも親しい、パリ高等法院の者でなければならないが、誰か解らない。

一五九一年一一月七日の手紙（二―14）は、確実にパリ高等法院の弁護士ドージェに宛てて書かれた一五九三年一月一二日の手紙（二―15）と同じく、ドージェに宛てて書かれたものであろう（Baldwin, III-91, p. 182 参照）。

(7) 一五九〇年一月二〇日の手紙（二―12.1）p. 3.
(8) 一五八九年三月の手紙（二―10）。
(9) Richart, p. 68.
(10) 一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 3-4.
(11) Richart, p. 66.
(12) 一五八九年三月の手紙。
(13) Richart, pp. 66-8.
(14) Ibid., p. 83.
(15) Ibid., p. 68.
(16) République, III, 5, p. 436.
(17) 一五八九年三月の手紙。
(18) 一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 3-4.
(19) Richart, pp. 68, 230 [290].
(20) République, IV, 7, pp. 648-9.
(21) 一五八九年三月の手紙。
(22) 同手紙。
(23) 一五八九年八月一五日の手紙（二―11）。

(24) 一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 4-5.
(25) 一五八九年三月の手紙、一五九〇年一月二〇日の手紙 p. 6.
(26) 一五八九年三月の手紙。
(27) 一五八九年八月一五日の手紙、一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 16-8.
(28) 一五八九年三月の手紙。
(29) Richart, pp. 131-2.
(30) 一五八九年八月一五日の手紙、一五九〇年一月二〇日の手紙 p. 5.
(31) 一五八九年三月の手紙。
(32) 一五八九年八月一五日の手紙。
(33) 同手紙、一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 16-8.
(34) République, I, 9, p. 201.
(35) 一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 9-13.
(36) 一五八九年八月一五日の手紙、一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 13-4.
(37) 一五九〇年一月二〇日の手紙 pp. 7, 15-6, 18.
(38) 一五九〇年前半の手紙（二—13）。
(39) Démonomanie, IV, 5, fol. 208 v:「……発見した魔術に関する本はすべて、ただちに燃やすよう裁判官全員に厳命することがとくに必要である。」
(40) Richart, pp. 228 [288]-230 [290].
(41) Ibid., p. 235 [295].
(42) Ibid., pp. 311 [371]-313 [373].
(43) 一五九一年一一月七日の手紙（二—14）。
(44) 同手紙。
(45) 一五九三年一月一二日の手紙（二—15）。

《Summaries of Contents》

Jean Bodin et son temps (4)

Takao KIYOSUE*

Table des matières :

Avant-propos
Bibliographie
I. Ouvrages de Bodin
II. Lettres de Bodin
III. Études sur Bodin
Livre I. L'âge de formation : 1529, 30–1559
Introduction
1. La famille
2. Au couvent carme
3. Aux Lecteurs Royaux
4. A Toulouse
Livre II. A la recherche de la pratique : 1559–1574
Introduction
1. Comme avocat du Parlement de Paris
2. La *Méthode*
3. La *Réponse à M. de Malestroit*
4. Le chemin de la vie politique
Livre III. A la recherche de la pratique (suite) : 1574–1584
Introduction
1. La *République*. Les critiques et les contradictions
2. Les états généraux à Blois
3. La *Démonomanie*

* Lecteur à l'Université d'Éducation de Hokkaido (Asahikawa)

4. En Angleterre et aux Pays-Bas
…(jusque-ici, tom. 25 n°4, tom. 26 n°3, tom. 28 n°1)
Livre IV. A la recherche de la tranquillité : 1584–1596
Introduction
1. La *République* d'édition latine et l'éducation des enfants
2. La période de la Ligue ……(ce présent numéro)
3. Le *Théâtre de la nature*, le *Paradoxe*, et l'*Heptaplomeres*
4. La paix et la mort
Conclusion

La présente étude essaie d'élucider en une synthèse la vie et les idées de Jean Bodin ensemble. Ce présent numéro contient ses actions et ses idées de l'âge de crise (1584–1593) qui est provoqué par les morts successives de duc d'Alençon et duc d'Orange. Nous en expliquons en détail la situation qu'il fut forcé de se réfugier à la forteresse intérieure, qu'il a abandonné la vie politique et l'étude sur la république, et qu'il a recherché la tranquillité dans la méditation sur Dieu du justice terrible et son mystère caché en la nature.